

779. 1-Ma63ウ



1200500752747

779.1

MA.63



始



テトIK-50

779.4  
MA63

雲右衛門以後

正岡

容著



文林堂双魚房版

PARLOPHONE RECORD  
E1248-A



「渡安院へ」  
「下に住み」  
「ならん所」  
「妻や子供」  
「まきけと」

浪花節  
甚兵衛渡し (佐倉義民傳)

春日亭清吉

PARLOPHONE RECORD  
1028-A



「慶安の陰謀」  
「三日月」  
「社が」  
「骨で」  
「それ」  
「にそれ」  
「摩訶」  
「野郎」  
「かいつ」  
「かいつ」  
「山田」  
「物出」  
「物出」

慶安大平記 香達道中附

木村重松

13 区 河 福  
ドーコレ AUGON TRADE MARK  
A 5113-A

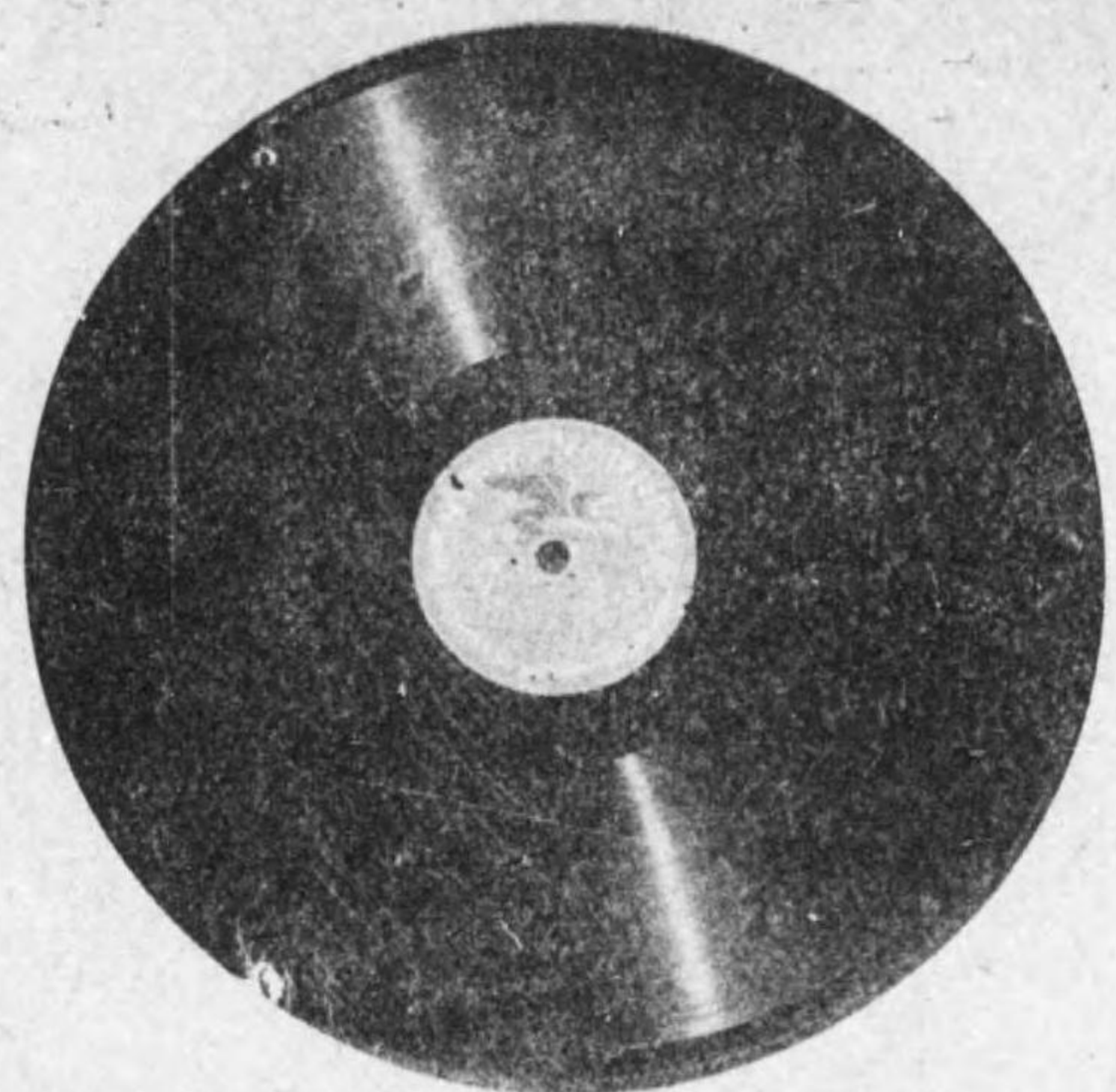


河内山宗徳  
浪花節 松江侯玄關先

木村重友

「慶安の花や散るらむ吉野山、心してほけ入相の鏡、吉野にあらぬ上野にて撰録  
山の木影より、仕度いたした河内山、上州屋に頼まれて旅の急務を止めために行かば  
ならぬ吉野屋敷、黒門目を掲げこんで到着いたした川村屋敷、寛永寺よりの後僧と  
き、重松一同出陣へは経緯萬端の代り、物に引かたつて立ち出でたるは  
河内山、慈然目五内を挽ひ、物に動かぬよ、虚無、いと驚きに會して、使者の問方  
に通られる、妻や子供もてなしに、さて御使僧の働きは、

AUGON RECORD



— 第四圖 —

附香新正改 競氣人打鬥 曲浪本日大 率七拾和昭

此圖展示了多位人物的肖像，可能與體育或社會活動相關。圖中文字包括「附香新正改」、「競氣人打鬥」、「曲浪本日大」和「率七拾和昭」。

— 第五圖 —



— 第二圖 —



— 第三圖 —

—第六圖—



口繪解説

第一圖 明治末から大正・昭和と飛躍した關東節の巨匠故酒吉・重松・重友が昭和初年吹込盤の文句カードに於ける小影と得意の演題

第二圖 廣澤當昇速記本(大正九年版樋口隆文館發行)

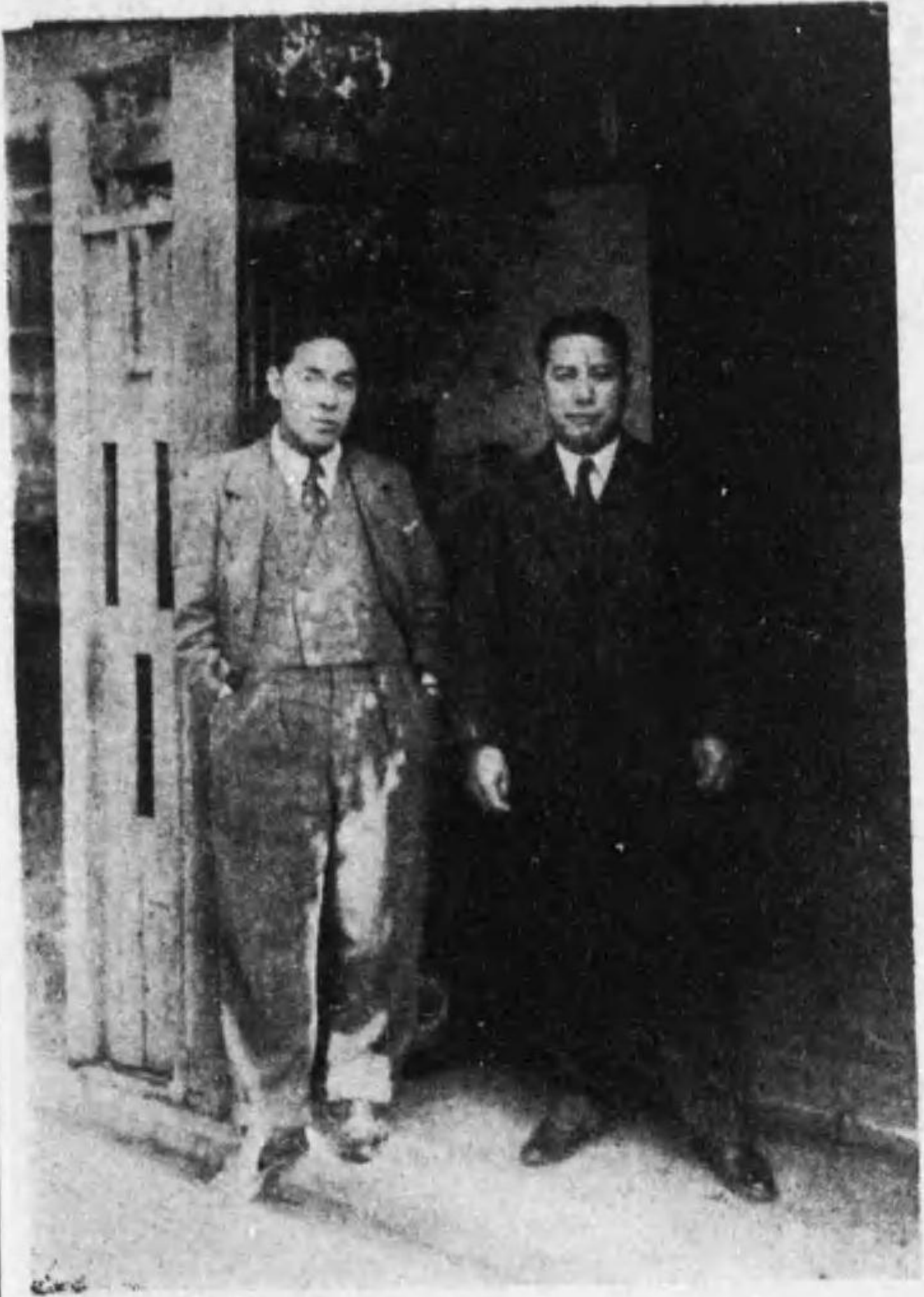
第三圖 關西節に今も残る「河内十人斬」(前野芳造著、明治二十九年版鼓々堂發行)

第四圖 桃中軒雲右衛門「安中草三郎」の圓盤

第五圖 昭和十七年版浪曲大番附

第六圖 著者と奇才小金井太郎の醉中合作「酒のめばかり」ちの花咲きにけり(昭和七年ころ)

第七圖 玉川勝太郎と著者(昭和十一年ころ)



—第七圖—

雲右衛門以後章録

小引

序章。浪花節是非……………一

第一章。桃中軒雲右衛門篇……………二三

第二章。明治末年篇……………八八

第三章。大正年代篇……………一五三

第四章。昭和年代篇……………二三二

附章。新人その他……………二七〇

同。戦争と浪花節……………二七五

同。浪花節はどこへ行く……………二九二

あとがき……………三〇五

968  
108

雲右衛門以後

— わが浪花節研究 —

装  
幀

水  
島  
爾  
保  
布

## 序章 浪花節是非

いづこを是とするか、浪花節の。

いづこを非とするか、浪花節の。

近世浪花節の發達を叙するに際して、冒頭、先づそれらの問題に付いて、充分なる考察を施して見度い。

然し、浪花節と云ふこの大衆演藝には、罵倒されても仕方のないところが多々ある。

同時に、他の諸演藝には絶えて見られぬ独自の至上境も亦、少しとしない。

いま、公平に、それらの短所長所をあげつらふことによつて、浪花節そのものの全貌を明らかにし、以而、この貧しき研究の序論としよう。



全く世に、浪花節ほど識者の鑿鑿を買ひながら、僅々五十年近くの間、全大衆の心の隅々まで食ひ入つてしまつた演藝もあるまい。いや、今日でも文化人の過半数には食はず嫌ひに嫌ひ抜いてゐる人々が少くない。

所謂知識人が嫌ひな許りでなく、一部舊東京の傳統に育まれた江戸ツ子と稱する手合にも、場違ひそのものの藝術として輕蔑されて來た。

云ふ迄もなく舊東京人が娛樂の對象として渴仰した演藝は、先づ講談であり、先づ落語であつた。講談や落語に比して、往年の浪花節は、藝人そのものも、演出法も、演藝場も、餘りにも野卑であり、低調であつた。それが太しく嫌厭されたのである。

宣なる哉。

創始期に於る講談が、天下の御記録讀み、太平記讀みとして苗字帶刀御免であり、江戸の落語が太田南畝、山東京傳、市川團十郎、立川馬馬ら文人雅人粹客の四疊半に於る風流三味から出發したのと異り、浪花節の發達は全くの大道藝術として

幾變轉を重ねて來た。それ故の血と汗と泥とが、その「藝」と「人」とにしつこくこく絡り付いてゐた。

かるが故に、逸早く最下屬の庶民階級には、親しまれ、迎へられ、謳歌されたが、當然、對遮的結果として洗鍊された舊東京人や知識階級の人々の間には、全く輕蔑されてしまつてゐたのだ。

思ひ浮ぶまま我が文壇に於る浪花節嫌ひの諸先生の記述を抄録して見よう。

先づ永井荷風先生は、かの「澤東綺譚」の一節に、

『殊に甚しくわたくしを苦しめるものは、西國訛りの政談、浪花節』  
とかいてゐられる。

泉鏡花先生の浪花節嫌ひは、恩師紅葉山人以來二代に互るものらしく、「瀧の白絲」を得意とする浪曲家林伯猿が先生御在世の頃、下六番町のお住居へ伺つてその浪曲化を願ひしたら、

「この作品は紅葉先生の一と方ならぬ御加筆に依つて世の中へ出たものだ。所が

その紅葉先生は浪花節が大のお嫌ひだったから、あなたが舞臺で口演なさることは見て見ぬ振りをしてゐませうが、亡き恩師のために圓盤化だけは、平に、ごうか」とお断りを頂いたと云ふ。さう云へば先生の「日本橋」ではお千世をして、

『嘘よ、お前さんぢやないのよ、其の大高源吾とか云ふ、づんぐりむつくりした人がね、笹を擔いで浪花節であるいては、大事な土地が汚れるつて……橋は臺なし、堪らないつて姉さんが云ふんだわ』云々。

さらにこの先生の御嫌厭のほどを裏書するものに、久保田万太郎氏の隨筆集「八重一重」中の「露寒の記」なる鏡花追憶がある。

『最近七八年は、ラヂオの番組に浪花節の載つてゐる限り、その日は、御自分の放送は勿論、御自分のお書きになつたものをつかふことでも御承知になりませんでした』

と云ふのであるから太しい。

さう云ふ久保田氏自身も亦、隨筆集「雨後」の「浪花ぶし」では、

『向山庄太郎さんに叱られるかも知れないが、わたしは浪花ぶしといふものが大嫌ひである。蓄音機で聴くさへ恥辱と思つてゐる。——わたしにとつて藝人のもつとも下司なものは相撲とりと浪花ぶし語りとである』

と、泉先生と兄たり難く弟たり難き強硬さを示してゐられる。

小説作品中に浪花節嫌ひが登場するのは芥川龍之介氏の「文反古」で、タイピストが自分の求婚者の人となりを批判し、

『おまけに道樂は大弓と浪花節とだつて云ふんぢやないの？それでもさすがに浪花節だけは好い趣味ぢやないと思つてゐたんでせう。あたしの前ぢや浪花節のな数字も云はずにすましてゐたの。處がいつかあたしの蓄音器へガリ・クルチやカルンウをかけて聞かせたら、うっかり

「虎丸はないんですか」

つてお里を露はしてしまつたのよ』

と云ふ一節がある。

木村莊八畫伯の「寄席冊記」と云ふ隨筆にも、

『昨日の淵は今日の瀬とよく云ふが、僕は子供心に昔、浪花節を聞くと、ぐつと胸のわるくなつたおぼへがあります』

があるし、未だ未だ調べたら、この種の浪花節嫌厭者の文献は、まことに少くないことであらう。

此を要するに、西洋趣味の山の山人種からも、生粹の江戸前を尙ぶ下町人種からも、狭撃的に忌み嫌はれたものが、我が浪花節の『宿命』だつたのである。

今日、我が知人間にも、浪花節嫌ひは頗る多い。

では、ごがそれほど毛嫌ひされるか!?

指弾されるか!?

雲右衛門、樂燕の亞流たる「義士傳」又は「乃木將軍」系統の物語、もしくはそれに類似した忠孝美談の押賣がいかにも淺薄な似非道德を強要されてゐる感ありて洗鍊された情操を有つ人々には反感を持たずにはゐられない。

同時に、この種の語り物に相應しき雲右衛門系統の水調子と稱する最低音の三味線の音調、またこの種の演題の演者に限られてゐるいやが上にも押付けて腹の底から絞り出すあの力味聲も、さうした人々には滑稽千萬で肯へないと云ふのだ。

いかにもそれは首肯できる、筆者にも。

雲右衛門や樂燕は名人上手であるから、その種の物語でも迸る藝魂が人を打つのであるが、その亞流のまた亞流たる三流四流の人々が、露些の精神なく、徒らに形態のみを模倣したこの種の演題は、崇高ぶり、壯重がつて演出される丈けに不快感のみが先立つて、私と雖も愉しくはない。現に、前述の泉先生の「日本橋」中の浪花節非難など、『大高源吾』云々と明らかにこの種の登場人物に依つて展開される浪花節の雰圍氣をば指摘して、輕蔑されてゐるではないか。萬々一、列擧して來た先輩諸氏と雖も、例へば「新藏兄弟」「祐天吉松」「深川裸祭」等々の纏綿たる市井人情を經緯と主題せる演題によつて、先づ浪花節そのものを聴取せらるることあつたなら、よしや愛好せられずともかくまで排斥せらるることはなかつたであらう。

が、翻つて考ふるに、今日の浪花節の絶大な全國的支持の原因を大別したら、或はその半分以上は、この忠孝美談的安價なる道德觀の強調にあるのかもしれない。嘗ての床次内相の浪花節をして思想善導の具とされむ企畫も全くそこに胎胚したのであるし、今日、肇國文藝の諸氏によつてさまざまの原作が提供された所謂愛國浪曲運動の發生原因も、略々同一理由にあるのだから。

さうして、今日のごとき時世に於ては、それらの運動に浪花節の取上げられることも、一つの用途であるとおもふが、此については別項に於て細述するから、ここでは觸れないことにする。

第二に、浪花節の排斥される所以のものは、舊來のその歌詞にある。

あへて、調を七五に整へるために、教養なき彼らの多くは汎ゆる珍語奇語劣語惡語を創造してゐる。

噴飯に價するものが少くない。

此れ又、識者の眉をしかめて、近付かうとしなかつた原因のものがあらう。

一世を風靡した先代東家樂遊（現、東家悟樂齋）が最得意とせる、渡邊默禪原

作「小松嵐」の佐和利を見よ。

〽殺さば殺せてと馬子の時、

齒をくひしぱり兩眼閉ぢ

耐こらゆれますれば……

世に『耐こらゆれますれば』と云ふ語があらうか。

更に後段物置小屋に縛された馬子お時に近付く下僕權次を叙するには、

『權次はお時に面會をなし』

と滑稽な誇大語を使用してゐるし、同じ場面の歌詞に於ても、

〽物置小屋へと參まゐられる。

など、此又、非常識なる敬語を以て充ててゐる。

先年物故せる人情噺の談州樓燕枝は、大谷内越山氏と廿餘年前、さる浪花節の寄

席を見學したら、幕末物を語る一藝人が、

『山谷の八百善へ集つて大盤振舞ひの薩摩侍、汁粉を喰ふ者もあれば壽司を喰ふ者もあり』

と云つたので、思はず抱腹絶倒してしまつたと、死の直前、筆者に語つたことがある。

『藝者小萬に料理八百善』と蜀山太田直次郎をして歌はしめたる江戸隨一の割烹店八百善のそも何たるかを、この浪花節子は毫末も識るところなかつたのであらう。

一ところ、落語家の『諸藝穴探し』と題せる枕噺の中の浪花節に對する冷嘲のギヤグに取上げられた、

「ブラリ／＼と急がれる

「二階があつて平屋ぢやない

の類ひ、概ね、此と軌を一にする明治期浪花節用語中でのナンセンスである。

筆者も、某の青年浪曲家の「鼠小僧」の駿府お熊殺しに於て、

『あさはたの淺間』

なる語を、屢々聽かされた。

『あさはた』とは何ぞや？

考ふること、暫次。漸く、此を諒解した。

即ち彼は、賤機淺間山しづはたせんげんさんなる『賤』の一字を『淺』と誤讀し、『あさはた・あさはた』と口演してゐたのである。

コロムビア圓盤會社專屬作詞家水野草庵子君も、

『有名な乃木將軍の辻占賣や信州墓參を聽くと、袖摺りあふ人々に、一々、のちのち乃木が變つた最後を遂げたと聞いたなら、それが詫の印ぢやと思ふて呉れと吹聽して歩いてゐる。こんな乃木さんはまことに困る』

と「浪花節愚談」の一節で揶揄してゐられる。

〇 第三の排斥原因。それには往年の浪曲家の人となり、また個々の生活の低かつたことが數へられよう。今日の浪曲家とは全く天地雲泥の差の低い人々が、そこには多く存在してゐた。

長田幹彦氏は、文壇人の中では珍しく、昔から浪花節を愛好された一人で、今時の肇國文藝主催愛國浪曲臺本にも、長谷川伸先生と共に共同脚色の名儀を貸し與へてゐられるが、その長田氏が先般、雑誌「現代」誌上へ發表された天中軒雲月に付いて書かれた隨筆を見ると、昔、さる浪曲家をモデルとせる小説を發表したところ、忽ちその背後にあつた暴力團に恐喝され、再び浪花節を主人公とせる小説丈けは手掛けまいと告白されてゐる一齣がある。

讀み終つて、筆者は他人事ならぬ感慨を催さざるを得なかつた。

その體驗が、筆者にも、正にある。あるのだ。

十餘年前、圓盤關係から、一浪曲師と交りを結んだところ、

「せひ兄弟分になりませう」

と云ふ。

此は兄弟同様に成らうと云ふ意味であらうと思ひ、應諾したところ、爾來、いかなる席上で面接するも、その浪曲師は筆者が先方より年下なるを以て「舍弟々々」と顎使して憚らない。

「兄弟にならう」とは、かの博徒に於る兄弟分と全く同一性質のものだつたのである。

忽ちに怖れをなして、臺本執筆の儀を謝絶し、友好關係をも解消してしまつたことがある。

又、さらに、別箇の浪曲師に至つては、醉餘同じく兄弟分たらむと云ひ出し、突如、懷中の挺刀<sup>ナイフ</sup>を取出して、筆者の二の腕を斬らうとした。

此れ又、博徒のそれのごとく、生血を啜つて兄弟の盟約を結ばむとしたのである。

筆者は顔色蒼白したが、當時の彼らの生活に於ては、これらは極めて日常茶飯事

であり、且つあくまで眞面目しんめんぱくの行動だつたのである。

かくては、一流文化人の蔑視を浴び過ぎたのも當然であらう。

昭和十五年晩夏、廣澤虎造興行問題を巡りての、淺草田島町に於る殺傷事件のごとき、以上、説述した浪曲家が傳統生活中の、最も舊體制に屬する部分の殘滓のあらはれと見做してよいであらう。

尙、此は排斥第四の理由にはならぬかもしれぬが、當時の彼らの藝格が決して高くなかつた裏書の一つには、價しよう。

明治末から、大正へ、昭和へ。

五寸釘寅吉や松平紀義など、一世を驚愕させた強盜や殺人犯が、數次浪花節の寄席へ出演した。

五寸釘寅吉は伊原青々園博士によつて小説化、そのかみの壯士芝居によつて屢々上演されたる明治開化の怪盜であり、松平紀義はお茶の水事件おこの殺しとてこれ

又新派演劇に上演を繰返されたる殺人事件の犯人自らである。

いづれも自身のざんげ談を専らとするのであるが、松平紀義のごとき、白地へ金の三葉葵の紋所を印刷したポスターを常に掲げて出演してゐた。然而、これらのざんげ談の前講を勤むる者は、みな少壯の浪曲師のみであつた。

尤も紀義と云ひ、寅吉と云ひ、正身正銘の本人自らであるが、他に、かの官員小僧の賈物が、やはり浪花節の寄席へ出演したことがある。講談にも、人情噺にも、芝居にも取上げられてゐる官員小僧義政は、勢州桑名の藩士の倅で、明治九年前後の事件であるが、この官員小僧は昭和五十年代に五十そこそこの人物で、全然、年齢が合はない。が、さるにても辯舌は稀に見る鮮やかさで、巢鴨監獄脱獄の件りなどは今も尙深く筆者の印象にのこつてゐる。

殊に、

『私が罪を犯しました』

『私が捕はれました』

『私が逃亡しました』

『私が愛しました』

と云ふ總て一人稱で事件を發展させて行く魅力の大いさは格別であつた。況んや、事件を十二分以上に發展させて、さて最後に、

『いよく私があの男を殺害する一席は又明日』

と結ぶに於ておや。嘘でも一と膝乗り出し度くなる魅惑が、そこに、あるではないか。

さらに餘談に立ち入るを許されよ。前述の五寸釘寅吉が淺草のある寄席へ出演の砌り、寅吉を訪れて来て、

「お前も早く眞人間になれ」

と説き付けられてゐる男があつた、男は平身低頭して、かへつていつた、同席してゐた浪曲師が、

「あれは誰です」

と訊ねたら、

「いや、つまらん奴でね」

寅吉は微笑を泛べて、

「あれは海賊房次郎と云ふ男ですよ」

傍らの浪曲師、忽ちにおぞ毛をふるつてしまつたと云ふ有名な挿話もある。

かりにも強盜や殺人犯と割看板を以てして出演してゐたのである。

ゐられたのである。

低くなかつたとは決して云へまい。

では、さうした浪花節と云ふ大衆藝術の、どこにほめられていい美點があるのか。

掬めども盡きせぬ美酒があるのか。

なせか、この藝術の最も『生命』たる可きこよなさに付いては、多くの人々が言



及してゐない。

浪曲家自身も氣付いてゐないか、云はうとしない。

で、あへて筆者のみ茲に特筆大書したい。

我が浪花節の一ばん愛好され、讃嘆され、再認識されていいと信ずるところは、先づ昭和十八年現在の關東浪曲の範鑄に於て云はうなら、木村、玉川、浪花亭に屬する大半數の人々の、何よりあの節廻しの哀々切々にありはしないか。

巷間市井の悲歌哀歌と云つたやうな、いかにもおもひつめ、惱み果て、悶えつくしたやうな、あのうらやる瀬なさにありはしないか、忍び泣きに、咽び泣きに、もしくは烈しい號泣に。

雲右衛門節以外は分らない人だつたが、流石に故松崎天民はこの間の消息を理解してゐたと見え、

『酒に酔へば きつと浪花節を唸りつつ 涙もよほす男なりしが』  
と歌つてゐた。

一首よく浪花節のみが有つセンチメンタリズムと云ふ小さな寶石の美しさを歌ひ得てゐるとおもふ。

江戸末年の市井の、哀切、骨を噛む夜の挽歌を新内節のくどきが代表するならば、御維新以後の爆烈お玉や河内の十人斬りやおこの殺しのお茶の水事件や相馬事件の起りつ消えつした文明開化期のあの悲しさ寄邊なさは、ひとり浪花節の節廻しのみが美しく傳へ得てゐると云つてよからう。

即ち、江戸投げぶしの滂沱たる涙こそ、これをそのまま明治、大正、昭和の浪花節の上に、哀しく美しき傳統の尾を曳いて流れかがやいてゐるものでなくて何であらう。

さうして、そのこと以外に、浪花節と云ふこの市井の「藝」の、他のいろいろの演藝に比して、特に味つて貰ひたいと自負できるところのものはない氣がされる。

同時に、これ一つこそ、世に聲を大きく唱へられていい浪花節と云ふ市井藝術の至上味醍醐味であると信じる。

思へ、浪花節と云ふものを。

彼らは、灯影涼しき濱町河岸の夏景色と云ふサラリとした江戸前の風情や、絃歌さんざめく島の内の春色夜景と云ふ上方情緒などは、關東節關西節をつうじて到底その藝術の中には描き出されない。

また、描く必要もない。

本所深川の暗い星月夜の街裏にひゞく蒸氣の笛のやるせなさが只管關東節のいちであり、河内は富田林邊りの打ちつづく雑木林をしめやかに濡らして行く片時雨の暗い寂しさが關西節のいのちであらう。

従つてあくまで晴れがましい華やかな佳さではない。

親のない兒の背後へ廻り、そつと肩に手を置いて駄菓子や二錢銅貨を呉れるやさしい物分りのいい庶民階級の小父さんのうしろ姿である。

さうした佳さにのみ私は、浪花節の「性能」を發見する。烈しい「彼」への親愛と愛着とを感じる。

と云つたら、それは、まちがひだらうか——。

以上。筆者は、いろいろさまさまの角度から、浪花節の長所短所を列記して來た。

そのよさについて、多少の独自の見解をあへてしたかもしれないけれど、わるさに於ては些かの假借もしなかつた。

徒らに我が田へ水を引くが如き、アバタも笑窪の如き、身びるきはしなかつた心算である。

たゞ一つ特別に斷つておき度いことは、次頁以降の明治中世以後から大正中世なご何とも云つて未だ未だ低過ぎた彼らの歴史をありのままに紹介して行くので——と云ふことは大正篇の浪花節の前身調べを一讀して呉れたら直ちに諒解して貰へるだらうが——今日の道德水準から見たら稍廢頽にちかい言動や生活なども、あくまで此は一つの歴史として何らの道義的批判をまじへず、紹介しておいた。

重ねて云ふがこの場合はあくまで「歴史」だからである。

読者はこの點をよく／＼理解され、次章以下繰り展げて行く雲右衛門以下現代に至る浪曲發達史の伴侶となつてほしいとおもふ。

## 第一章 桃中軒雲右衛門篇

一

桃中軒雲右衛門は、常陸國結城の在に生れた。本名、岡本峰吉。

父は旅廻りの祭文語りで繁吉。色の黒いところから、人、仇名して「くろしげ」である。

彼はその繁吉の次男で、藝名を吉川小繁と云つた。ヒラキ時代の小繁については、石谷華堤氏の「浪花節漫稿」が詳細を極めてゐる。

『父繁吉の死後、母親の三味線で淺草向柳原靱倉のヒラキへ出て居た。一座は櫻川一口と云ふ者を真打に小繁外二三人で、小繁の兄千吉は母親の手代りに三味線を

彈いて居た。後年桃中軒雲右衛門と名乗つた小繁の實弟は當時まだ幼少であつたためか、此叔倉の高座には上らなかつた。小繁は當時子供上りの若年者ではあつたが將來の大物たるべき素質を有して、聲、節、タンタの三拍子揃つて評判よく、眞打の一口よりは寧ろ小繁が呼びものになつて、客を引いて居た。兎角する中、小繁も寄席へ出て一かごの人気者となり、やがて小繁の名を弟に譲つて、自分は亡父繁吉を名乗つた。世間雲右衛門を知る人は多いが、小繁の寄席時代を知る者は少く、雲右衛門と云ふ浪花節の名人が天から降つたやうに思ふ人は、彼れが小繁の昔門付けに出で、又叔倉のヒラキに出で居たと聞けば定めし意外吃驚するであらうが、これは事實で、其時代のことを知る者は、藝人社會には大分ある。しかし此小繁から繁吉時代のことは、後年の雲右衛門の價値を損ずることは毫もなく、寧ろ彼れが、斯る境遇から身を起して日本一の雲右衛門となり、浪花節中興の祖とまで稱へられたるに至つたそれだけ一層、彼れがえらいものになるのではあるまいか』

漂泊時代の雲右衛門が甲州地にあつての姿は、左の村松蘆洲氏の一文に詳しい。

『(前略) 明治三十年の秋、或日吉川小繁といふ若年浪花節語りが甲府春日町に女俠客と呼ばれた瀧田ます婆さんを訪ねてきた、婆さんが北巨摩郡臺ヶ原に居られた頃吉川繁吉に伴はれてきた事のある小倅で、舊知の間柄である、雁が啼くのの白地の浴衣といふが實際その通りのみすばらしい姿であつた、もう晩秋の事とて寒さの早い山國の甲府では既に炬燵を立ててあつた、小繁はふるへながらあたふた炬燵にもぐり込んだ、何處から來たかと婆さんが聞けば信州の松本で一と興行やつたが不成績の爲め同僚と別かれかねて俠氣に富んで居るときき居るあなたを頼つて甲府を差して來たのであると語つた、婆さんは其窮狀に同情して數日して町内の競花亭で開演させる事とし二三の同輩をも呼び寄せて幕をあけた、其時の木戸錢は僅かに金三錢であつたそうだが、當夜になつて入場者は豫想に反し不入りであつたので折角の力添へも水泡に歸した譯である、然し態々呼び寄せたものにはそのままでは置かれず旅費を持たせて歸京させ、小繁だけは暫らくの間婆さんの處で食客となつて下男の代りを働いてゐたが、彼に見込みを付けてゐた婆さんは何うしてもこの道を成

し遂げさせたいものと旅費小遣を與へて東京に歸らせた、別かれる時に一生懸命勉強して一人前の語り手になつたら其時は亦來いと勵ましてやつた、其後數年を経て桃中軒雲右衛門といふ名人が東京に於て旗揚をし天下第一といふ評判であつたところで、上京した人の話によれば、その雲右衛門こそ先年甲府に放浪した吉川小繁であるとの事、婆さんはそれを聞くと彼がまさかそれ程までには出世をするとは思はなかつたと小踊りして喜び、顔見知りのものを上京させてその浪花節をきかせた處、確に昔の小繁であつた、當時櫻町に居つてそうした稼業の内藤藤十郎氏は婆さんと相談の上、甲府に招聘すべく上京して彼を訪問し久し振で昔語りを一日を過し甲府で興行の事を相談して見ると、當時の相場として地方で興行するとすれば一萬圓が普通であつた、特別で半分の五千圓で契約し、大正二年一月愈々櫻座で開幕した、その時の料金は金一圓で今の金とすれば五圓にも當るのである、それが案外の盛況であつた其結果、雲は舊恩に酬ゆる爲め多額の金を婆さんに贈つて歸京した、其後同好者の懇望により亦來峽した時は婆さんは既に故人となつてゐたので、其生地中

巨摩郡龍王村篠原の日蓮宗法久寺に大きな墓碑を建て、積徳院妙讚日増大姉——桃中軒雲右衛門入道建立と刻し關係者を招いて大法會を營み法久寺へも寄附をもし器物や幕なども奉納し、厚く婆さんの遺靈を慰めた、婆さんは山縣大貳先生の生誕の地に隣した所で産れた人である。(後略)』

また、雑誌「上方ばなし」昭和十四年八月號の、大阪唯一の講談師旭堂南陵が「僕と先代金原亭馬生」には、

『或座敷の待合せ中、當時浪曲界を奮起させた有名な桃中軒雲右衛門が書生を三四人連れて堂々と乗込んで來た。すると其席に馬生只一人座してゐるので書生は女中を呼んで先生は他の藝人と同席はせぬ故、別席を取つてくれと言つた。雲右衛門は入口に立つた儘である。此時馬生顔を揚げ、

「オイ小繁、威張つてるナ」

とやつた。スルト雲右衛門、馬生の顔を見て吃驚り、

「ヤア先生ですか、甚だ失禮を申しました」

と低頭平身、書生は呆れてマゴ／＼してゐる、と云ふ譯はこの雲右衛門が旅先で非常に困難の時、馬生君に救はれ、其上、義士傳の筋書等を教へて貰ふたと言ふ間柄、此事が馬生君の自慢で私は能く聞かされたものであつた』と云ふ一節がある。

この馬生は、今日も行者に轉向して、東京で餘生を送つてゐる。かの「小しんと馬馬」のモデルたる馬馬の馬生（古今亭しん生となつて没）と時代を同じうして、専らこの人の方は關西で活躍してゐた。元々江戸つ子で、赤坂の燕路の門下で小燕路を名乗つた人であるが、従つて燕路系の（故小勝をぐつと江戸前にサラリとア、クをぬいた）駄洒落澤山の地噺に長じてゐた。そのころの印象では軽くはあるがもう一つ迫力がないとおもつたけれど、今日聞けば立派に一方の長老としての「噺」であらう。晩年は、専ら東京の寄席へ出演してゐた。さうして、たしかにこの馬生は義士傳をやつた。「安兵衛」などを筆者も聞いたことがある。落語家で義士を十八番としたのはかの「寫眞の仇討」なる人情噺を創作した先代五明樓玉輔（松井翠聲

君の祖父）で、ステテコの圓遊が義士傳の「薪割り」を演じたのは嘗てこの玉輔門下のしう雀を名乗つてゐたためであるが、この玉輔の「義士傳」が燕路へ、次いで小燕路の馬生へ繼承されたものと見ていい。小繁時代の雲右衛門は、初期の彼が上演曲目を見ても分る通り「安中」や「四谷怪談」と云つたやうな端物讀みだつたのであるから、金襖物武家物を仕入れたく、馬生に材を乞ふたかもしれない。

寄席進出當時の彼に付いては、例の重松（二世重勝）の「重松の浪界四十年」に明らかである。「生活」の隅々までがハッキリと知られる。

それによると、當時の小繁は本郷の菊坂にゐたが、貧困の極みで、重松が門下となつて間もなく店立てを食つた。一家は小繁にお久と云ふ女房があり、品川の吉十と云ふ寄席の娘との間に生れた稻太郎と云ふ倅があり、お久はこの稻太郎を大そう可愛がつたさうである。（さうして臨終の床にもまた、このお久が附添つてゐたのだつた）それと繁之助を名乗つた重松の四人。彼らはその後、寄席の樂屋から樂屋を、チプシーのごとく轉々しだした。

このころの小繁は至つて信仰に厚い男で、高座を終ると素裸になつて水を浴び、不動様を拜み、心經を百べん誦したと云ふが、貧しさは募る許りで、つひにお久は稻太郎を連れ、郷里の九州へとかへつてしまつた。

繁之助の重松が品川の品川亭（のちの蓬來館）の樂屋で置去りにされてしまつたのは、それから三年後の出來事である。横濱で繁吉（もう繁吉を名乗つてゐた）は三河家梅車と興行し、薄倅の梅車夫人（お濱）を知り、同情した。同情は、やがて戀となつた。つひに弟子一人置去りに、關東を棄て去らなければならなくなつたのである。

が、この横濱時代の繁吉は、なか／＼に悔れぬ藝境に到達してゐたらしい。純關東の端物讀みだつた丈けに、寧ろ街氣澤山の盛年晩年より、人によつたら却つてこの時代の藝術にこそ好感を寄せたらう。筆者の如きも御多分に洩れない。先日、小堀誠氏もこの時代の雲右衛門が釋臺を前に語つた高座ぶりの素晴らしさを讚嘆してゐたし、松崎天民氏の「桃中軒雲右衛門」にも、

『横濱の寄席に現れて、父の名跡である繁吉を名乗り、「榛名の梅ヶ香」と題した「安中草三」を辯じた時には、一座の何人よりも、繁吉の美聲と節調とが、人氣の中心になつて居た。濱の顔役澤野巳之助が、早くも彼の才分に着目して、繁吉と親子の義を結んだのも、雲が三十になるやならないの時であつた』  
とある。

青春期の雲右衛門は、以上で全貌を盡したとおもふ。

## 一一

再び石谷氏の「漫稿」を引く。

『繁吉が寄席へ出て、人氣盛んに賣出した時、同社會に一大強敵が現れた。それは浪花亭綱吉の弟子で、出藍の譽れありと云はれた、初代浪花亭愛造であつた。（中略）繁吉の人氣に愛造の人氣、此競争は殆ど互角の觀があつたが、兎もすれば

繁吉は煽られ氣味で、愛造稍々優勢を示して來た。折も折繁吉は、横濱で例のおはまとの情事關係から、旅に出て、九州へ赴くこととなつた。これが彼れ繁吉のためには、却つて幸ひとなり、數年後の桃中軒雲右衛門の名乗りを揚げて、花々しく東京へ錦を飾つて來た。繁吉即ち雲右衛門の都落ちは無論おはまとの事件が表面の出來事とはなつて居るが、裏面に、此愛造との人氣競争が其一因となつてゐることは、消息通のひそかに肯く處であらうと思はれる（下略）

この愛造説は、全く前人未踏の異説である。しかも、篤實な石谷氏の説なるが故に、可成の信用を置いてもいいかに、おもふ。

横濱出奔後の繁吉夫婦は直ちに九州へ下つたのではなく、一と先づ京都へ落着いてゐる。

明治卅一年二月である。

京都大佛前、梅の家に興行中の京山花丸をたよつて行き、花丸の肝入で梅の家と

福眞亭を掛持ちした。

この前後、お濱は水垢離取つて繁吉の精進を祈り、二階を貸してゐた綿屋の妻女が、その殉情に涙を流したと云はれてゐる。

ところで平林敏滋氏の「興亡史」では、この時代に繁吉は、桃中軒雲右衛門と改名したと叙してゐる。「吉川繁吉」の名は、關東側へ對して使用を憚つたであらうから、梅の家出演と共に改名したと見ることは自然かもしれない。

では、その雲右衛門が、どうして再び京都を棄てたか。關東側の壓迫の手が、京都まで伸びて來たのか。京都で彼の高座が不評であつたのか。何が故に、九州さして走つたのであらう。

例の美當一調が空前の好評であり、この一調が九州出身たることを知つて、九州の地こそ好個の荒修業場と乗込んで行つたのであらうか。

前の二つの理由がないとしたら、此より他には全く原因が考へられない。



以上をしたゝめたのち、天民氏の「桃中軒雲右衛門」を再讀し、

『支那浪人の宮崎滔天氏も、何時しか雲右衛門の門人になつて居て、初めて九州へ乗込んだ時には白浪庵滔天と號せず、桃中軒牛右衛門と呼んで居た』

に至つて、九州行の原因が氷解された。

京阪の地に於て彼は已に宮崎滔天氏と相識つてゐた。さうして師弟の盟約さへ、交はされてゐたのである。

九州へ行け——とは、この滔天氏の烈しい慾態だつたのに間違ひない。勿論、その場合、一調の成功が彼の九州行の心理へ、拍車を掛けたにはちがひないが。

滔天氏は久留米市の町廻りでは、美々しく飾つた牛に乗つて、九州人を驚かした。雲右衛門の名に馴染はないが、滔天氏が門人であると云ふ事實に、人々は驚異

の目を瞠つた。

小倉・博多・長崎・熊本・鹿児島と、雲右衛門は全九州で獅子吼した。さうして、素晴らしい評判を生んだ。

『然も其の當時に於て、浪花節の臺本と云ふものは幼稚極まるものであり、節と云ひ文句と云ひ、とても士人の前で辯ずる價值と云ふものが無かつた、敏くも其の一事に著眼した雲右衛門は、九州人で支配人となつた小林陶雨や、長崎日の出の鈴木天眼、福岡日々の芝尾入眞、南部露亭の諸家を煩はして、臺本の整理に着手した、古來の「辯じ上げます」や、卑近な文句はこれを削除し、文句と節との調和と云ふことに、苦心し努力した。小學以下の教養しか無い雲右衛門でも浪花節の文句を添削する上には、驚くべき才分を示して、人々を驚嘆せしめた程であつた。(中略)宮崎滔天翁と共に九州に乗込んだと云ふ事は、後半生の雲右衛門を完成する上に、如何ばかりの助けとなつたかは、此の一事のみに見ても判らう』

天民氏の「雲右衛門」は、かく九州時代の彼の生活を浮彫りにしてゐる。

ところで、雲右衛門の九州生活は二、三年であると云はれてゐるが、明治三十九年、夏大阪辨天座へ出演したとすると、東都落が明治卅一年である以上、京阪の生活は四、五年間あつたと見なければならぬ。この間、絶えず彼は「一調」の現實の幻影に、示唆され、激勵されつづけてゐたらう。さうして、祭文の、關東節古調の「安中草三」の舊衣を次々と脱ぎ棄ててゐたらう。それが間もなく親近に白浪庵滔天を見出したことにもなつたのである。

雲右衛門の大阪出演は超満員で、彼の浪花節に感奮して小指を切つて舞臺に現れた、少年まであつた。

さうして、この三十九年の初冬、はじめて東京本郷座の舞臺へ、晴れの進出を示してゐる。雲右衛門、時に、年、三十四歳。

ただここに見逃す可からざる新聞記事がある。明治卅五年十月三日の「讀賣新聞」である。

それは神田錦輝館に於る白浪庵滔天の浪花節公演を報道してゐるのであるが、そ

の發表會に、なんと雲右衛門その人が出演してゐることである。此に據ると、本郷座出演以前に、彼は一回丈け私かに滔天のかけにかくれて東京で公演してゐる。此は「桃中軒雲右衛門」の藝名なら「吉川繁吉」の轉身たること分らないのをいことに、久々の帝都大公演に先立ち、一つの「瀬踏み」をしたものではなからうか。質す可き松崎天民翁、在世ならざるを憾みとするのみ。

とりあへず記事の全文丈け一讀してほしい。

『三十三年の夢』を著はして夙に奇傑の名を以て知られたる白浪庵滔天（宮崎寅藏）は、今回新體浪花節桃中軒を組織し、雲右衛門、數右衛門等と共に一昨夜及び昨夜の兩日午後七時より神田錦輝館に於て開會せるが、筑前琵琶二番、浪花節二番に次いで桃中軒牛右衛門高席の見臺の上に立つを見れば、かの大兵肥滿なる黒紋附の形装にて「慨世奇談」一席を演じたり。演説口調の割れ鐘の如き音楽は、纖弱なる三絃に和すべくもなく、勝手次第に講じたる荒筋は北米土人の會長某の傳記にして、移住民の爲め侵害せられ、既に鐵道布設の計畫あり、僅々數十坪に狭められし

居宅も又爲めに掠奪せられんとするを嘆じ、その病を獲て轉地療養せる鐵道局長を瑞西に尋ね、その娘某に戀慕し、後袂別に際して途上妖怪に會するといふ奇談なり。拍手喝采は更なり、切聲は場外に迄鳴りて立錐の地もなき迄の大入なりし。』とあくまで滔天がすべての中心であり、桃中軒の結社も亦滔天の名によつて紹介されてゐる點、數年後一大旋風を捲起した雲右衛門の「藝」に付いては一顧だにされてゐない點など、なか／＼に興味深いではないか。

#### 四

東京本郷座に於る初出演は、新橋から華々しく馬車で乗込み、官傳萬端拔目なく、武士道鼓吹を標榜して、普く滿天下へ呼びかけた。

この興行、十日間。

演題は、「義士傳」の前後二席。

襖は二つ巴の紋散して赤穂義士を利かせ、雲右衛門自身も二つ巴の五つ紋、長髪に波打たせて、颯爽と舞臺へあらはれた。

テーブルを前に、絢やかなテーブル掛けの装ひ凝らして熱演したこと云ふ迄もないが、これ丈けでも瞠目一驚するところへ、在來の外題附を廢し、一禮すると、

「不辯」

と云ふのみで、直ちに、

「まきのふもけふもかき曇り

とすぐに本文へ入つてしまつた。

雲右衛門として「伊賀の水月」など外題附を付けてゐる場合もあるけれど、この初公演にはセンセーションを起さす意味に於てでも、殊更にそれは避けたものと考へられる。

しかも、そのころの雲右衛門の「藝」については、雑誌「日の出」昭和十六年二月號「愛國浪曲座談會」に於て、東家樂燕、松風軒榮樂が左の如く述べてゐる。

樂燕。僕は、雲右衛門先生の藝に傾倒して、教へを乞ふために養子になつた、謂はば藝の上の養子なんです。月收二、三千圓あつた僕でしたが、先生の養子になつてから月々與へられる小遣ひは五十圓ぼつきり、修業のためと思へば、金なんか少しも問題ではなかつたですよ。

また、榮樂のは――

榮樂。それは、あなた、大變なものでしたよ。私は東海道を巡業中、静岡の若竹座で先生の浪曲を始めて聞いて、あんまりうまいので一席のうち三度も身體がふるへ出したもんです。聲はあまりよくはなかつたが、いかにも豪壯で、同じ泣かせるにしても決して無理に泣かせない。つまり、ほんとの腹の藝でした。

木村重松の「重松の浪曲四十年」の末尾にも、晩年の雲右衛門が横濱座出演中、

「大石妻子別れ」を讀んでゐて仆れ、樂屋へ醫者を招いて注射をしてもらつた。さうして再び登場したけれど、その樂屋へ下りていつた何十分間、千人以上の客が幕を見ながら、文句一つ云はずに待つてゐたと誌されてゐる。

松崎天民氏は

『雲右衛門の特色は、その雄渾にて壯重な節調にあつた。聽衆の呼吸を吞吐する妙味は、此を故人にして團十郎か高田實と一脈相通するものがあり、これを今人にしては、澤田正二郎の藝風と、相通する實感の力があつた。』

「山は雪、麓は霰、里は雨……。雨、霰、雪や氷と隔つれど、落つれば同じ谷川の水……知らいでも世は忙……」

とは「中山安兵衛生立」中の文句であるが、雲はこれを一呼吸と思はれる如くに唄つて、聽衆の胸をつかむことに、非凡の手腕を持つて居た』と評してゐる。

即ち、好嫌は別としてこれほどの一大迫力ある雲右衛門が、前述のやうな豪華無

類の宣傳の結果、目も絢な大劇場で、己の眞面目を吐露したのである。

ことごとく世人は壓倒された。

征服された。

絶讃と云ふ絶讃を惜まなかつた。

「桃中軒雲右衛門」の名は忽ちに津々浦々を風靡した。そこにもここにも、長髪族の浪花節が出現した。そしては「何々軒何右衛門」の名を名乗つた。「武士道鼓吹」の大旗を掲げた。

『武士道もつひに彼らに鼓吹され』

井上劍花坊氏の川柳ある所以である。

一夜に五百金を得、大石内藏助を氣取つて祇園にあそび、百圓紙幣を羽織の裏へ縫ひ付けて、幫間に投げ與へたのも、このころであらう。

北海道大沼公園で同行の者らに角力を取らせ、土俵へ銀貨の雨を降らせたり、新橋の旗亭で大小の銀貨を卓上に山積し、人々の争ひ取るに任せたと云ふのも、同じ

時代であつたらう。

支配人として小林陶雨、神煙波、峰田一步、吉田博氏があり、客員に猪股愁霧樓、石松夢人、田中不知火氏があり、樋口罔象、市村俗佛、桑野桃華、水谷幻花、田口櫻村、松崎天民の諸氏が交友してゐた。頭山満翁や古賀廉造博士も挾援し、藝界人では水野好美、佐藤歳三、高峰筑風が傾倒してゐた。

明治四十年三月廿三日の國民新聞には、

『先つ頃伊東元帥、神戸の大黒座にて桃中軒雲右衛門の「赤垣源藏」を聴きしが、深く感動したる餘り、其後再三使を遣はして同市の常盤花壇に招き、「能くまあ此の間は此の老爵を泣かしたな」と盃を擬し、再び「赤垣」を所望せし由。然るに此事早くも目下舞子に御滞在遊ばさるる有栖川宮大妃殿下の御耳に達し、「元帥を感動せしめた雲右衛門とか云ふ者を聴きたきもの」との仰せあり。家令は雲右衛門の止宿せる神戸停車場前の淺勢館に訪ね、其儘早速御別邸迄同行せよとの有難き仰せに雲右衛門天にも上る心地して直ちに御請致さんとせしが、退いて願れば如何に改

良を唱へたりとて是迄の聴衆は、兵兒帶と突かけ草履の間に多く、自然雲上の御聞を憚る文句の多きにぞ。なまじ御前に出でて失禮の事ありてはと深く御辭退申上げたるに、苦しうない罷り出でよとの事に、然らばとて去る二十日門弟二三名を引具して舞子の御別邸に伺候したり、當日大妃殿下には別邸二階の大廣間正面の高座に、紫緞子の褥を敷きて御座を定め、後方一面金屏風をめぐらし、御床の遙か下手に雲右衛門卓子に對してかしまりて、扱て語り上げたるは「南部坂雪の袂別」内藏助淺野後室別れの段にて、次で「赤垣源藏徳利の別れ」を言上せしに、大妃殿下には熱心に御耳を傾けさせられ、並る居し御付の人々もホロ／＼と熱き涙の落つるを禁じ得ざりしが、一段終つて、然れば是れにて御暇仕らんと申上げしに、殿下にはなか／＼に御許しなく、「雲右衛門今一段」との仰せに、這度は稍々趣向を代え、「不破數右衛門芝居見物」と云ふ滑稽の一段を讀上げしに、殿下には殊の外御満足に渡らせられ、愈々退却するに際し「いみじきものよ」と御賛稱あり、「こころざし世に並びなき雲右衛門、雲をつらぬく心地こそすれ」の一首を賜りしと。』

云々。

東京進出後、日ならずして彼は、この光榮に浴してゐる。やがて明治四十五年末には、歌舞伎座へ出演。天下の名優が五人も六人もかゝつて大入にするこの小屋を自分一人で満員にしたとて、馬車に乗つて方々を乗廻したりした。

ところで筆者は雲右衛門剃髮の動機を、餘り長髮のイミテーションが輩出したので、その逆を行つて入道となつたものと解釋してゐたら、天民氏は、此を四十四年の出來事とし、

『京都の松の家に泊つて居た頃、博多から馴染の女が訪ねて來たとかで、急いで自分の顔を剃つて居た。その時、何うしたハズミであつたか、前髪の方を過まつて深く剃り込んだので、その場で理髮職を呼んで、クリ／＼坊主になつてしまつた。再び東京に現れて、新富座で興行した時には、「桃中軒雲右衛門入道」と名乗り、被布姿で辯じたが、それが一つの人氣轉換策になつて、世人の好奇心を唆つたりした。何でも無いハズミから、入道頭になつたけれど、折角の坊主頭を臺無しにする

やうな男ではなかつた』云々。

筆者の考へてゐた意味とは全く差違してゐる。

しかるに東京朝日新聞は、明治四十三年六月廿二日に、雲の入道ぶりを、筆者の断定通りのものに報道してゐる。

『桃中軒雲右衛門は丈なす髪を油氣なしの大髻に結びたるを「頃は元祿十二年……」と打ち振りく、毎夜南座劇場に出勤し居たるが、十九日の朝は女房おはま、妾のおとくの兩人、石山見物に行きたる留守中、雲右衛門は何と思ひてか、突然剃刀を取出して看板の長髪ごそくと剃り掛けたるにぞ、門人は更なり、附人等も吃驚仰天し、石山へ電報を掛けるやら、大騒ぎをなす。其の央におはま、おとく等驅け戻り、何うした譯の御發心と様子を聞けば、豫て逆上の氣味ありて、坊主になりたく思ふて居た折柄、昨年浪花節の連中が我もくと俺を見ならひ、髪を長くするから、愈々此の髪が嫌ひになり、夫れに倅巴右衛門も仲裁する人あつて勘當を許すことにしたれば遠からず親子二人で九州の巡業に従ふべく、其の時倅の髪が長いの

に、自分も同様の長髪では第一目先が變らねば、夫れや此れやで、クル／＼とやつた次第、心配するな、次興行からは桃中軒雲右衛門入道で、舞臺に人氣を揚げて見せると。(京都電話)』

さらに山本笑月翁の「明治世相百話」に至つては、

『雲の長髪は有名であつたが、その後なにを感じてか五分がり頭になつて雲入道と改名、見た目も貧弱で引立たぬと思つたら、また一年程すると總々した長髪に返つた。そのとき本人いはく「腦が悪くて髪を切りましたが私は元來腹が薄く、聲を張るのは左手で横腹を押さへ、首を振る、それには坊主頭は恰好がつかぬ。長髪がばら／＼と亂れると物々しくもあり、腹を押さへても目に立たず、一舉兩得で又伸ばしました」といはれを聞けば有難い。』

全く三種三様の解釋であり、ここに至ると故人に親近してゐた人の断定に俟つより詮方ない。殊に、笑月翁の再長髪説があるかと思ふと、天民氏は前掲の文章の直後で『最期まで坊主頭か五分刈頭で居た』と書いてゐる。『腦が悪くて』剃髪した

と云ふ點は東京朝日の記事も笑月翁のも一致するが、ひとり天民氏の年代、動機に於ては全く問題を異にしてゐる。

この場合筆者としては朝日新聞の記事に、最も信を置きたいところである。何より雲右衛門らしい考へ方なので――。

ところで熊谷爲蝶編「名家演藝ひかへ帳」(明治四十三年・東雲堂版)に雲右衛門の藝談が載つてゐる。

『(前略) 奈何も一般の浪花節語りは無教育でいけない、それからして改良してかからねばならぬといふ考へから、一の浪花節學校といふ物を設け、吾々は及ばずながら教師となつて改良進歩を謀らうとしたんですが、奈何も思ふ様にはならんもので、遂には折角の計畫も晝餅に屬して了つたのは残念でした(中略) それで私は武士道鼓吹者となつて義士銘々傳のみを語るといふ事にしたんですが、第二には舞臺へ出る風姿が奈何もいけない、御承知の通り東京(筆者註――とうけいと雲右衛門發音してゐる)では前に床を据へて演者は着物の裾を刎ねて座る慣ひがある、それ

が甚だよくない、で私は机を廢して見臺を用ひ、自ら威儀を正して來客諸君に對する事に改めたんです、第三には近頃の藝人は指輪なんかを嵌めて、金色、燦爛として舞臺に出る様ですが、是は大いに批難があるので、私はハイカラがつて居るには金剛石入のピカ／＼するのを嵌めて居たんですが、或る最負の方の忠告に因て廢めました、未だ時計だけを持つて出たのを、此程或人から忠告を受けてハット思ふて持たぬ様にしましたが、恚ういふ様に悪い點があつたなら、御忠告を願ひたいものです、是は只口先ばかりで六ヶ敷い事をいつた處で其意味は奈何いふものかと反問を受けた場合には其答へに困る様な事があつては、何にもなりませんから先づ演者の頭から改めたいものですが、是は容易な業ではありませんから、私も死ぬ迄は其心得で骨を折つて見る考へですが、奈何も一般の同業者に只お客さへ來ればよいといふ主義の人が多いので、奈何も思ふ様にならんものです』

雲右衛門は増上慢と云はれた。街氣漫々でもあつたと云ふ。



が、流石に藝談に於ての彼は、かくも神妙に「藝」と云ふものを考へてゐる、みつめてゐる、また、困しんでゐる。

この敬虔さは微笑めるとおもふ。

## 五

雲右衛門は大正年代に入り、右肺を病んだ。吐血した。重松（二代重勝）が最後に對面した、例の千人の聴衆を待たせて注射をした横濱出演の砌りも、もうよほど、病勢は進んでゐたにちがひない。一氣に歌ひ下す呼吸の使ひ方にも可成困難を感じてゐたのだが、ただ一般の人々がそれをば氣付かなかつたのである。

最初の吐血は名古屋に於てであつた。

このときに凡俗な醫者が胃の出血と誤診したため、長い間、雲右衛門は肺病とせず、大酒をしたり女色を近付けたりした。

粟津の温泉や、法師温泉へでかけ、肺病患者に禁物の入湯をあへてして、同宿の人々に無料で浪花節を聴かせてやつたりした。いよいよ病勢は昂じたのである。

この雲右衛門の肺病は、妻女お濱のそれが傳染したものであると云はれる。先づお濱が大正年代に入ると共に患ひ付き、駿河臺病院で病没した。藝道上の恩人たりしお濱が死に際し、雲右衛門は遺骸を神田入道館に移し、通夜の夜も生ける人にも云ふが如く話しかけ、一夜を亡骸と添寝して慟哭した。

此に先立つて靈岸島で貞奴と云ひ、新橋へ轉じた藝妓千鳥（本名、お玉）を落籍してゐたが、病魔はやがてこの千鳥のお玉へも感染した。雲右衛門が入道と成つたときの東京朝日の記事の、妾おとくとあるは、このお玉の誤りではなからうか。大正四年には同じ疾患で、このお玉も名古屋の假寓で死んでいつた。雲右衛門もすでに右肺を患つてゐたのであるが、このときもお玉のために二人大の寢棺をつくらせ一夜をその中で過した。

雲右衛門は最後まで己の死を考へず、いままではとかく他へのみ財を散じてゐた

故、今度は家族や門下に金を取らせてやるぞと病床で云つてゐた由であるが、死後の自分の「生活」が豊富であらうとは、流石に考へなかつたものらしい。峰田前支配人並びに繁吉時代からの支援者たる横濱の顔役澤野巳之助に計り、名古屋で發病する一、二年前、南品川妙國寺境内へ五千圓を投じて三十坪の墓所をしつらへた。「本正院妙道日順大姉」と並んで「桃中軒義道日正居士」の戒名を、生き乍らその墓標へ刻んでゐた。この妙國寺境内には今日、雲右衛門の銅像も建てられてゐる。故人と交友繁かつた松崎天民氏の葬儀が、偶々この寺で行はれたことも因縁と云へよう。筆者は酔眼へ涙をたたへて徳富蘇峰翁の天民哀悼の演説を聴きつつ、本堂の窓からそそり立つ雲右衛門の銅像を仰ぎ見た雨の日の午後の有様を忘れない。昭和九年の夏であつた。

さて、重態に入つた雲右衛門は上京を望んで、大正五年夏、目白の宮崎滔天氏宅へ運ばれた。間もなく滔天氏の世話で近くの佗びしい二階屋を借り受けたが、その二階が終焉の場所となつてしまつた。

臨終の光景は親しくその場にあつた天民氏の手記に據ることが一ばんいい。

『宮崎滔天夫妻は上海へ旅して在らず、枕頭に一子西岡稻太郎や、舊門人の猪股秋霧樓や、峰田一步や、竹の家の女將や、村雲、青雲の二門人や、宮崎震作氏や松崎天民などが居合はすのみであつた。瘠せ衰へた彼は、それでもまだ死を覺悟せず、義士傳の改訂を思ひ立つたり、日蓮記の大成を期したり、辨慶衣川の一節を古い節で口誦んだりして居た。「一聲千兩だ。早く快くなつて、日本一の劇場で演りたいなア」と述懐したりした。痰が咽喉に絡んで一、二度、虚空をつかむやうな風をしたが、もうそれなりけりで、細つた手足も動かなくなり、眼を一方へ見つめたのみで、淋しい冷めたい「死」が這寄つて居た。

雲右衛門が世に遺したものとては、一二萬圓の借金と、毛皮が二三枚と、五圓紙幣が十三枚、銀側の懐中時計などであつた。遺言状があるやうに取沙汰されたが、淋しい納骨式の席上でも披露されず、まだほんとの葬式も営まれずに、月日は過ぎて行つた』

時、大正五年十一月七日午後三時。  
行年四十四歳であつた。

六

桃中軒雲右衛門と云ふ異色ある藝名は、何を根據として付けられたか。  
松崎天民氏は、

『お濱との一件から、横濱を追はれた彼は、東海道の沼津に於て、辨當屋桃中軒の名を其の儘、家の名として襲ひ、天下に汎くはびこりたいとて、雲右衛門と云ふ名に改名した』

と解釋してゐる。

今日ではこの解釋が、一般的には最も正當とされてゐる。

さらに天民氏は、雲右衛門夫婦がこの桃中軒と云ふ辨當屋の世話になつたためと

か、失意落魄の車中にここの辨當の美味に接して忘れ難く、せめてこの辨當の美味にあやかりたいとて、桃中軒の亭號を名乗つたためとか、この二つの考へ方をも發表してゐられた。草月流の生花の家元たる勅使河原蒼風氏のごときも、殆んど同様の左の一文を最近の東京新聞「逸譚」欄へ發表された。

『汽車のお辨當で知られてゐる沼津の桃中軒と、浪曲家の桃中軒雲右衛門の桃中軒といふ名とに、因縁のあることを聞いておもしろいものだと思つた。さきごろ私は、はからずも沼津の桃中軒に、速水御舟畫伯の名品があつて、見せていただけることになつたため、その桃中軒へ出かけて行つたのである。

この桃中軒は、昔も東海道往來の旅人達が辨當をとる茶屋であつたさうで、そのあたり一面に桃の林であるところから桃中軒といふ名は自然に出來たのである。

雲右衛門がまだ無名で諸所を巡つてゐた頃、この桃中軒で休息をしたわけである。その時辨當にしるされた桃中軒の文字を見つけた彼は、やがて東京に出て來て桃中軒雲右衛門と名乗りをあげたといふことである。

私等でもよく知つてゐるが、武士道鼓吹浪曲といつて雲右衛門の評判は、どこでも大變なものであつた。それで沼津でもこの大家を迎へる日が來たわけである。もちろん雲右衛門は、この思ひ出話をして感謝の意を表するのために、桃中軒を訪れた。

食堂の名によく何々軒といふのがあつたし、浪曲家もたいてい何々軒といふやうだから、こんなことを氣にする人もなかつたらうし、氣がついてみたところで偶然としか思へない。なにしろ本元の桃中軒が雲右衛門に言はれて感心したといふ話なのである。

しかし、知らずに考へれば雲右衛門の上に桃中軒などといふ、妙味ある字句の調和は、よほどの學者先生にでもつけて貰つた名の如く思へるところが愉快である』が、石谷華堤氏は全く觀點を異にした独自の意見を、例の「漫稿」の中へしたためて居られる。

往年の角力記者の第一人者であり、併せて演藝消息通の白眉であつた氏の考へ方

丈けに、まことに傾聴す可きものがある。

雲右衛門の小繁時代、天津風雲右衛門と云ふ力士があり、天津風は何彼と小繁の面倒を見てやつてゐた。

そこで明治卅何年だかの春場所で、この天津風の角力に物言ひが付いたとき、もう繁吉になつてゐた一杯機嫌の彼は、ノコノコ土俵へ上がつていつて、

「天津風の勝だ、勝だ」と絶叫した。

此は翌日の各新聞へも出、石谷氏自身もこの光景を目撃してゐたと云ふ。まことに天津風と繁吉の間柄は並々ならぬものであつたらしい。

さてさうした結果、再起の彼はあくまで舊恩を忘れず、天津風の名である雲右衛門を名乗つて藝名とした。然而、上京後も年寄秀の山となつて極めて不遇だつた天津風の面倒をしじう見てやり、終世、その世話をしつづけた。

このやうな因縁があるのだから、雲右衛門の名の由來は、この天津風の名前以外

では断じてないと、石谷氏は云ふのである。

此は在來、兎角ハツキリしなかつた雲右衛門の藝名由來説の内でも一ばん確實な根拠がある。第一話そのものもまことに微笑ましくてよろしいではないか。

さらに沼津の桃中軒に厄介になつてゐたこともほんたうで、亭號も名前も兩方とも舊恩を忘れないための命名であると云ふなら、さらにうれしいと筆者はおもふ。

妻女おはまの死に一夜を添寝してやり、情人お玉の死には寢棺へ共に入つて慟哭した雲右衛門は、まことに多感の熱血兒であつたにちがひない。此丈けでも、單なる俗流低調の藝人には見られぬ青白い情熱が、ふつふつと彼には燃え沸つてゐる。

加ふるに「重松の浪界四十年」を讀めば、繁之助時代、品川の寄席へ置去りにしていつた重松（二世重勝）と、後年、名古屋驛附近の寄席で再會したとき、昔のことは許せ〜と切りに彼、詫びてゐる。さうして、名古屋で人氣のなかつた重松を、土地の大親分出井源五郎に引合はせ、幟や背ろ幕を貰つてやつたりなど、一と

方ならない面倒を見てやつてゐる。

また、最後に雲右衛門が横濱座へ出演したとき、同じ横濱の壽亭へかかつてゐた重松の方は雲の人氣に負けて、すつかり客が減つてしまつた。

すると、雲右衛門は一黨數十人を引連れて棧敷へ見物に来てやつた。

重松が挨拶に行かうとすると、一座の頭目がそれには及ばぬと制し、終演後の對面には、自分が興行したため客を奪つたことを深く詫び、かへりには表木戸へ一人廿錢の木戸を百人分、即ち廿圓積んでいつた。

また翌々日も、三日目、四日目分として卅圓、木戸へ置いていつた。

その翌日も廿圓、置いていつてゐる。

さうして五日目の打上には、また樂屋から、表から、重松にまで應分の祝儀を與へて發足してゐる。

重松の自傳を讀むと、入門當時、彼は全く寢食を忘れて貧困だつた雲右衛門の小繁に盡してゐる。にもかかはらず、雲右衛門は、彼を置去りにして逃げた。それ丈

けの弱味があつたからとは云へ、世には後輩に不義理の仕放題をしつくりして何ら省みない人々も決して少くない。

雲右衛門が一再ならず重松のために報ゐてゐるところを見れば、彼を恩儀の二字を辨へなかつた人とは考へられない。

いよいよ石谷氏の「天津風雲右衛門説」を筆者も力説し度いとおもふ。

## 七

友人小針正治君宅には、故松崎天民の書がじつに澤山ある。故人は待合遊びがはじめたくなると必らずこの人をさそひ出し、その代り當夜の自分の遊興費の分だけ、色紙短冊半折の類ひで償ふを常としてゐた。従つて旗亭へ一步足を踏入れるや否や、色紙を買はせ、墨をすらせ、實に大童で二十首、三十首の啄木擬ひの短歌をしたためて行く。何のために遊蕩に來たか分らないやうなものであるが、いかにも

そこに故人の面目が躍如としてゐる。そのときの記念の一つであらう短冊に、

喜多村の話も出たり、雲右衛門の話も出たり、酒のうまさかな

と云ふのがあつた。

大阪南地あたりの紅燈街での酔餘の作となづかれるが、いかにも一升酒を傾けてゐたころの故人の倂がマザマザと目に見えて來る。

しかし亡き人は雲右衛門とは格別に懇で、その臨終にまで立ち合つた丈けあつて、雲に關して丈けは、いろいろさまさまの知識を持つてゐた。

前掲の剃髪のとまごときと異論の生する場合もあるから、今、俄に氏の知識の全部が全部を承認はできないとしても、雲右衛門の「藝」を愛する情熱に於ては、全く天民の右に出づるものなかつたのではなからうか。

〽蕭々とふる雨の中

笠も冠らず頭から

ぐつしより濡れた濡れ鼠……

盃を手にすると「村上喜劍」のこの一節を、雲右衛門張りでよく唸つた。赤い灯  
青い灯の道頓堀のカフェーで、いくたび筆者は故人の雲節を聞かされたことだつた  
らう。耳朶に、あの雲節を蘇らせ、故人の黒眼鏡を偲ぶとき、何とも云へない懐し  
さに、眼底おのづか自らうるむをおぼゆる。

へ片時も 忘るる間なき

いとしなつかし義経に……

と云ふ「静御前」の吉野落もよく語つた。

「此は雲右衛門の一ばん優美な哀婉な節で、ね」

さう云つて故人は黒眼鏡の奥でニヤツと笑つては、また唸りつづけた。

松崎天民の雲ぶしはその後、オデオンレコードに吹込れた。筆者は今それを切り  
に探してゐるが、見當らない。

竹田敏彦氏が該レコードに關係してゐるときで、何べんも天民氏を介して現在の  
吉田奈良丸（三代目）を吹込ませうとしたのだが、奈良丸は他社の専屬で話が纏ら

ない。

敏彦氏はじめ一同がすつかりくさつてしまつてゐたら、

「止せ〜奈良丸なんか。もつと〜いい浪花節がある」

と天民氏、云ひ出した。

その「いい浪花節」と云ふのが即ち夫子自身のこと、此が契機となり、たうと  
う吹込んでしまつたのだと云ふから愉快である。

曲師は嘗て雲右衛門を弾き、のち雲の臨終にも侍つてゐた愛弟子蛟龍齋青雲の三  
味線を弾いてゐた爺さんで、すつかり本寸法のものであつた。題は「浪花節漫談」  
と云つたとおもふ。昭和五年ごろのことであつた。餘談であるが、この爺さんはそ  
の翌々年か、大鉈を揮つて青雲を惨殺しかけて牢獄につながれた。いろいろの意味  
でこのレコード、もし今あれば思ひ出が深い。

さて天民氏からいろいろ聞いた中にこんな話が有る。

雲は一面なか〜世間體と云ふことを考へる男で、お濱の葬儀の日、天民氏が洋

服姿で銀座を歩いてゐると、偶々さしかかつて来た葬禮馬車の中から、

「松崎君オイ松崎君」

手を出してさし招いた。

さうして無理から馬車の中へさそひ入れ、銀座通りから新橋を渡つてさびしい通りまでやつて来たなら、

「もうあんたは下りてもいい」

と云つた。

よくよく聞いて見たら、折角豪華な馬車で葬ひを出し、銀座通りを練らしたものの、未だそのころの浪花節仲間の悲しさ。洋服姿の見送人が一人もない。

で、洋服姿の松崎天民をせめて銀座街頭を通過する間丈け、臨時のマネキンに便乗せしめたのであると云ふ。

いかにも雲右衛門らしい挿話である。

『野氣あり、街氣あり、匠氣あり、稚氣あり、何處までも名人氣質と云つた風の

性格を見せて居た。それで居て、小心で、嫉妬深くて、神経質で、人を容易に信じ得ないやうな、器局の狭いところもあつた。書生達は食はせるのみで、ロクに小遣錢も與へぬのに、世間に向つてはバツバと、無い金でも工面して、撒くと云つた風の性分に見えた』

天民氏がかう云ふ風に雲右衛門を観察してゐるが、可成、此は肯綮に當つてゐるものである氣がされる。

恐らく桃中軒雲右衛門とはかかる人物であつたであらう。

『宮崎滔天翁の如きは、後になつても師弟の誼を忘れず、雲を「師匠々々」と呼んで居たが、雲はまた好い氣になつて「滔天々々」と呼捨てにしたり「牛右衛門」と呼んだりして居た。(中略) 常に病床に侍して、介抱して居た田中不知火氏が、後、同じ肺病で死んだのも、痛ましい事だつた』

こんな記述も、天民氏にはある。

重ねて云ふが、ほんたうに松崎天民は雲右衛門節に傾倒してゐた。否傾倒以上の



ものがあつた。何か、絶えず、ありし日の雲右衛門の節調を幻の彼方に追ひつづけ  
ては戀ひ返してゐる彼であつた。現、奈良丸に隨行して四國方面を旅行したり、雲  
右衛門の末弟子である酒井雲と交つてその圓盤を一日に何十枚となく聴いたりして  
居る雜筆があるが、それらは徒らに雲右衛門を哀慕するよすがを多からしめたのみ  
であつたらうと云ふ氣がされる。

今西吉雄氏の「今昔流行唄物語」に、

『雲右衛門は芝の新網で育つた。彼は死の直前、筆者の友人J氏が彼を見舞つた  
時、「私は小さい時に貧民窟で育つたために、カクヤだとか乾物が好きで、贅澤な  
御馳走は性に合ひませんから、滋養分が足りないと云はれてもごうしても、御馳走  
が食べられないので悲しく思つて居ります』

往年の浪花節連中が梅坊主らと一つ長屋に住んでゐたかの鑑札下札時代のことを  
考へて見ても、若き日の雲右衛門が新網に居住してゐたことは自然であるが、故人  
天民も亦貧困の少年時を送つたためか、澤庵、梅干、せいぐおでん位の類ひを至

上の嗜好物としてゐたことは些か乍ら因縁と云へよう。

此を要するに、桃中軒雲右衛門は、松崎天民にとつて、げにや久戀の「藝術」で  
あり、「人間」であつた。

## 八

我國蓄音機の渡來、普及と浪花節との關係は、次項に譲つて、茲ではレコードに  
於る桃中軒雲右衛門に付いてのみ言及し度い。

山口龜之助氏の「レコード文化發達史」に據ると、雲右衛門のレコード化はかの  
奈良丸以後とされてゐるが、

『旭日昇天の勢ひを示した桃中軒雲右衛門は、二軒の録音會社へ聲の二重賣を敢  
行した。先口は獨逸からきたライロフオーンで後口はニッポノホン。勿論おくびに  
も先口とのかたい契約が洩らされてないので、後口の方では、自分が獨占だと獨り

合點で、大枚壹萬五千圓を奮發した。當時——明治四十四年——各地の興行は花道にも一杯に人を坐らせた程連日滿員で雲右衛門レコードの出現は、やいの／＼と製造會社へきつい催促に及ぶファンが決して少くなかつた。さればこそ、先に奈良丸レコードで大當りを經驗したニッポノホンが、今度は雲右衛門レコードで更に一と儲けを目論み、こちらから持ちかけた事として先方の云ひなり放題で、引きづられるがままに、壹萬五千圓で手を打つたのである。

この手打ちが出来るまでには、ものの半歳の月日が徒らに流れた。昨日は東、今日は西。まるで電のやうに居所の一定しない相手を追ひかけて、千葉の巡業先へ出掛けると、その咄ならば小田原でと逃げを張られ、小田原の宿へ詰め寄せると、東京へ歸つてからユツクリと云ふ具合に、掌上の珠よろしく、手玉にされづめだつた。そして會ふ度んびに新規蒔直しの咄なのだから一向に埒が開かない。

その年も暮れて、翌年の春未だ浅い或る夜の事、數寄屋橋際の待合竹の家が仲にはいつて、どうやらこうやら目鼻がつき、片面盤四十枚の着手料として金五千圓也

の授受が行はれた。あとの壹萬圓は第一回演奏當日に支拂を條件として。

その當日ともなれば、雲右衛門は家の子郎黨總勢三十餘名を引具して、いと物々しく弓町の録音スタジオへと乗込んで来て、契約の曲種の一部分の録音を兎も角も濟ませた。ここまで漕ぎつけければアトはもう一ト息き。急ぎ原盤調製に取りかかり、出来る事なればその月の内にも臨時發賣として、これだけの曲目をすらりと發賣して世間をアツと云はせる心算で居た。

夜半の嵐が吹いた。

寢耳に水の訴訟沙汰。原告がリチャード・ワダマン（ヴァンニエロツプ商會支配人）、詐欺及び教唆の汚名をかぶされた被告はニッポノホンの社長と重役、および雲右衛門。（中略）咄が落つく迄には紆餘曲折、すつたもんだの揚句、先口に花をを持たせて（中略）ニッポノホンは全く貧乏籤をひいてしまった』

結局、その年の四月に三光堂では、南部坂、正宗孝子傳、大石御藥獻上、大石山鹿護送、大石生立、村上喜劍、大石東下り、赤垣徳利の別れ、安兵衛生立、回婿入

り、横川勘平、岡野金右衛門、前原伊助、神崎與五郎の十四種を發賣したに對して、ニッポノホンは忠臣二度目清書、荒木奉書試合、曾我物語、靜御前吉野落、近世浮世裏表を出したのみに過ぎなかつた。

成程、前者が雲右衛門得意中の得意の物を網羅してゐるに引代へて、後者は「靜御前」位のほかは、全く二番手三番手の演題である。

さて、大枚の金を支拂つてしまつたニッポノホンはその後、雲右衛門に對してどうしたか。

『雲右衛門の未録音曲種に對し、契約履行を督促の交渉を續けてゐたが、相手の居所が轉々して、不得要領のうち、四十四歳を一期として、雲入道は蓮華座に乗込んでしまつた。喧嘩過ぎて棒ちぎり。ニッポノホンでは大正九年七月に「安中草三郎（大門口）」十年二月に「日蓮記」を發賣してみたが殆ど問題でなかつた』

此に依ると辛うじてその後二曲の演題を吹込ませたのみで、この問題は止を得ず終結してしまつたやつである。ニッポノホンの一大損害のほどが察知せられる。

しかし乍ら、ニッポノホンには氣の毒であるが、おかげで我々、浪花節研究に參與するものは、意外な儲け物をしてゐると云へる。彼、雲右衛門が「義士傳」以外の「面」をいろいろ識ることのできるのは、一に此らのレコードあつたがためであるからである。それらのレコードには、なんと雲の擡頭以前の節調がしばしば残存してゐる。筆者は片面に一心亭辰雄の「赤垣源藏」を收めてゐる「安中草三」（大門口）を祕藏してゐるが、例のへあすこに三人ここに五人、八方十方に手配りができまして」と云ふあの早間の節廻しは、ちよぼくれに近い。「近世浮世表裏」に至つては一そう阿呆陀羅經のギャグである。また、音律である。

「ニッポノホン音譜文句全集」（大正六年版）にその歌詞の一部があるから引用して見よう。

『海には汽船陸に汽車、軒には光る電氣燈、酒屋へ三里の片田舎でも、人の力で曳く車、國に劍あり内には大學中學小學校、町村共に役場あり。建てた警察駐在所人民保護の巡查あり、斯る届いた明治の御代でも、時によりては賄賂沙汰、浮世

を詰めた謀叛人、夜半に寄來る白浪や極細小は狐鼠々々泥棒（中略）斯る輩が愚にも知れぬと思ふは淺薄よ、天は誠を照すぞよ、悪い事して知れずに居るよぢや、お天道様が無駄光り』

もちろん、かうマクラをふつて、いかなる美談へも大惡傳へも容易に入れるわけではあるが、それにしても雲調らしから阿呆陀羅臭紛々たるものではないか。

筆者は吉川小繁の體臭を嗅がせてもらへた點に於て、ニツポノホンの大損害に、深甚の感謝をささげてやまない。

## 九

雲右衛門のことを、徳川夢聲君は近著「天鬼將軍」の中の「浪曲譚」の中で、

「私はこの男をあまり好かない。

どうもハツタリの權化みたいな氣がしてイカンのである」

とかいてゐる。

また、

「故松崎天民氏は、大の雲崇拜家で、後年、「彼から色々逸話など聞かされると、成る程、雲があれだけ賣り出したのも尤もであると、感嘆させられたが、嫌ひばかりはやはりどうにも變更されなかつた」

ともかいてゐる。

同感である、筆者も。

この「雲右衛門篇」の中でも巧さは立派に認めておいたけれど、決して好きであるとは一回もしたためてゐなかつた。

夢聲君もさうらしいが、筆者も事大主義と云ふ奴が大嫌ひである。

それについて雑誌「食道樂」松崎天民追悼號（昭和九年九月）に於る拙文「蓮葉飯天民供養」の一節を讀返して見ると、

『昭和七年七月十八日附のてがみはおもしろい。——ぼくが雲右衛門をキラヒだと

いつたときの返書だ。

「(前略) 兄が雲をキライと云ふは、浪花節に對する大なる偏見、又は認識不足に候。關東節も好けれど、雲の好きは又自ら別趣あり、レコードでおきき下されたく候。浪花節はひとり關東節が好いと云ふに非ず、も少し汎くきいて下されたく候。雲をきらいにして、何ぞ浪曲を語るに足るべき。大いに兄の偏見を正したく候(下略)」

と云ふ風に、ぼく、大いに先生から、叱られてゐるのである。

が、ぼくは雲右衛門も、云はうなら同時に澤正も好きになれない。さらにもう一つ云はせてもらへるなら團十郎もすべて、ああした正面を切りすぎた系統の藝術をすべて好まうとしない、——巧さは認め、偉さは認める。が、好きにはなれないばくなのである。

狂へる辻潤が、

「團十郎と松助とごつちが偉いなんて議論はやめて貰はう。エルマンと橘之助、

バヴロバと梅坊主、また然りだ」

と云ふイミのことを「ですべら」でかいたが、あれはすべて、東京人の藝術の信条である。

松助が、菊四郎が、壽朝が、工左衛門が、源之助が、いや、梅坊主が、はげ龜が、先代文樂が、故市馬が、しん生が、重松が、重浦が、溺愛されるぼくと、天民先生と、この點丈けは、つひに生涯相容れなかつた。

ぼくはやつぱり裏まぢの、淀んだ堀割に明滅する星屑をこそいとほしむのだ。』  
としたためてゐる。

蓋し、今日も偽りない自分の小感である。

全く巧いまづいでなく、團十郎の活歴のごとき、ゲーテのごとき、ダンテのごとき、いたづらに大きいものに、はごうしても血のちかさがかんじられない。夢聲君は何からかうした思想をやしなはれたか、筆者は、永井荷風、泉鏡花兩先生の文學の影響であらうとおもつてゐる。

で、雲右衛門も亦正にその一つである。前文の中でも述べてゐるごとく、功勞は  
みとめるが、血は遠い。ハッキリ云はせてもらふなら、さうである。

先代浪花軒の友は、

「劇場へでる浪花節に巧い人はいくらもゐませんよ」

と云つたさうだが、此は、ほんたうである。

今日でも、劇場讀みで、ほんたうの「藝」を持つてゐる人は五人か六人だらう。

が、が——ここに、困つたことができてしまつた。

いまから小十年前までは、一から十までたしかに故の友の云ふ通りだつたのであ  
るけれど、どうであらうそれが。このごろの中堅どころの番附を見ると、劇場讀と  
しての大きさもなく、寄席讀としての巧緻さもないのが多い。多いぢやない、殆ん  
ど大部分となつてしまつてゐる。ここ十年——十年とは云へない死にやうをしたも  
のであるとおもはずにはゐられない。

夢聲君は、どうか。

筆者のごとき、そろ／＼年來の持論の旗を捲いて、雲右衛門的存在でもいいか  
ら、もはや巧くさへあれば誰でもできてくれ。

かう悲鳴を上げようかとさへおもつてゐる。

ところで、明治四十一年三月二日の東京朝日新聞には、痛烈なる雲右衛門嫌ひが  
藝評をしてゐる。

『浪花節、浮れ節、チヨンガレ節とかいふものは聞かない先きから嫌ひであつた  
ところフト辰雄の大石東下りと南部坂雪の別れを聞いてから、いやしい節だがあ  
くらゐやれば結構なものだと感服して、夫れから急に浪花節が好きになつて、例の  
美當一調の切節も聞いた。日本一だと云つて紛議を招いた吉田奈良丸の義士銘々傳  
も聞いた。是も相應に聞かれたから雲右衛門の浪花節は有名なものだから、ヨリ以  
上の妙味があるだらうと、シトシト雨の泥濘を冒して昨夜の本郷座初目をききに行  
つた。夫れも十八番中の十八番堀部安兵衛の長講三席だと廣告に出て居たからだ。  
本郷の電車停留所には大緑門が建つて權大教正桃中軒雲右衛門と顯はしてある。茶

屋暖簾は例の山道を染出したのが軒端に翻つて景氣は大上吉で、八時前後には錐も立たぬ大入。雲右衛門萬歳と祝さねばならぬ。扱前座が二席すむと雲先生例の結髪で悠然と演席に着いた。見ると寫真で見るとは大ちがひ、矮小で甚だ風采が揚らぬ。舞臺は支那料理屋を見るやうに、幟やら旗やら、内藏之助の肖像やら、夫に麗々しくお供物が上るやら、頗るヤ、コしい。雲先生何やら迂鳴り出したから演題は何かを見ると「大石江戸さぐり」といふのであつた。江戸さぐりとは耳新しいと耳を澄まして居たが、更に捉まへ處がない。如何に初日だからとてコンナ物を聞かせるのはヒドイ。筋はツマリ吉良の邸が朱引内にあるので之を他へ移轉させたいといふのが眼目であるらしい。後の百より今五十だとか、染物屋の主人も染料次第で間に合はすとか陳腐極まる警句を吐くと、聴衆はワツとうける。ツマリ雲は客を魅する呼吸を知つて居るばかりで、初日の處ではドコが節がよくつてドコの詞がいいのか少しも其味がかみ出せなかつた。此アトは山科別れといふのであつたから少しは聞きごたえがあつたかもしれぬが、最初の一席で高を括つて引下つた。コケ嚇しも

可い加減にするが宜い。(半眠生)』

よく／＼の大天才でないかぎり、その日の演題に依つて、著しい出来不出来はある。名手神田伯龍、「小猿七之助」は無類でも「梅林少尉」に至つてはゲンナリする。巨匠一龍齋貞山も三尺物を聴かされては「義士傳」ほどの妙味は到底ない。かね／＼此は筆者の持論であるから、たつた一席の出来如何でかう云ふ批評もどうかとおもふが、この批評家の文章をよく／＼噛みしめて讀んで見るがいい。批評子は雲右衛門の「藝」よりも、先づ「權大教正」に反感を抱いてゐる。デコ／＼な舞臺の裝飾にモロに輕蔑を感じてゐるのだ。吉良邸の朱引内なども大いに困るけれど、何より辰雄を愛するこの批評家なら、それらの俗流な豪華さが不快で／＼ならなかつたのである。

ムベなる哉。「半眠生」とは、じつにかの瀬戸英一氏が嚴父たる、都下有數の藝通であり、粹人である。

此を以てしても一應の都會神經を有するものに、雲右衛門のあのハツタリ的演出

はいかに喜ばなかつたかと云ふことが、ハッキリと肯かれよう。

十

文學作品として桃中軒雲右衛門を取上げたもの、此を戯曲にして眞山青果翁の「桃中軒雲右衛門」門があり、此を小説にして小島政二郎先生の「山ならば富士」(學藝社刊「ちちははの紋」所載)がある。

先づ、前者から語るとしよう。

此は澤正によつてまた井上正夫によつて上演され、月形龍之介によつて映畫化された。

筆者はこのほど「三遊亭圓朝」を劇化される青果翁に、圓朝その人のことに關して、一、二回、會見した。そのせつ、偶々この「雲右衛門」の話がでた。それによると翁は往年、相州酒匂に於て雲右衛門の一子稻太郎と相識り、父親を怨んで孤獨

の生活をおくつてゐる彼に同情され、學校その他、進んでいろいろの良き相談相手になつてやられた。

幸にして稻太郎、學業の成績も良く、翁を世話甲斐あつたことを喜んでゐられると、我子のよき成長を耳にして喜んだ雲右衛門はこの子をしばらく學校を休ませては巡業先へ呼び寄せた。許りか、遊蕩の味さへも教へたりした。

大憤慨した青果翁は以後父子とも我家へ出入して呉れるなど云ふ意味の手紙を、雲右衛門宛叩き付けたところ、八方陳謝した返事と共に、朝鮮土産なりと云ふ大なる虎の皮一枚、雲右衛門から贈り届けられた。

翁はいよ／＼憤慨され、敢然とこの虎の皮を送り返した。

その後も稻太郎のみは眞山家へ出入して、先年没するまで親しく交つてゐたと云ふことであるが、じつにこのときの印象を土臺に、松崎天民、峰田一步兩氏の資料を得て完成されたのが、かの「桃中軒雲右衛門」であると語られた。

従つて稻太郎の理解者で、雲右衛門と取つ組み合ひをする新聞記者倉田楚人は、



風貌その他、全く松崎天民氏であるが、まことは青果翁その人の、往年の雲右衛門への憤慨がそのまま滲み溢れたものであるとおもふ。

それにしても恐縮して虎の皮を贈つて来たなどは、いかにも「權大教正」雲右衛門でなければならぬ。

雲右衛門に付いては、翁自ら『この傷ける天才藝術家』は『わたくしの最も愛好する性格者の一人』であると云はれてゐる。

また世人は彼の『倨傲、尊大、傍若無人、豪奢、驕慢』のみを見て『うちに潜む哀愁、憂苦、弱小、悔恨の内省的懊惱』を知らないとも云はれてゐる。

いかにも十二分以上の好意を持つて描かれてゐる態度であるが、にも係らず翁はこの上演を見るたび、一再ならず故人関係の人々から雲右衛門を冒瀆するものとして、不快な抗議を申込まれて居らるる。暴力團のごときを率ゐて来たものさへあつたと云はれる。

かうした行動は、浪曲家の中に未だ大道藝人時代の遺風が残存してゐる證據で、

大いに今後慎まねばならぬところであるが、ただ一つ此は絶対に翁の責任ではないが、彼らにさうした行動をとらしめる可く、雲に付いて語り傳へた天民氏の雲右衛門觀に、遺憾の點はあつたとおもふ。なせなら天民氏は、たび／＼雲右衛門に付いて執筆してゐるが、いつの場合も、必ずお濱事件を雲右衛門一生の汚點とし、此に付いて頗る雲が煩悶してゐたやう誌されてゐる。

青果翁はそれをそのまま、取上げられたから、ここに面倒な問題が涌いて起つたので、筆者はかねてこの天民説に、多大の私疑を抱く一人である。

梅車お濱の夫婦生活は、已に事前<sup>に</sup>於<sup>て</sup>破綻<sup>して</sup>ゐた。梅車の亂酒狼籍を原因としてある。

偶々そこへ登場して来た雲右衛門は、お濱の三味線に感嘆し、瞠目した。さらにことごとく傾倒しつくした。ああ自分はこの絃の伴奏あるによつてのみ普ねく大地に己の藝を發揚できると云ふことを、深く／＼信じ込んで止まなかつたのだつた。浪花節の場合に於ける三味線と云ふものの重要さよ。ある場合それは生死を賭

してまで獲得してしまはなければならぬものであると云ふ局外者には到底理解しがたい奥祕の消息を、読者はよく／＼知つておいて貰はないとこの雲右衛門の場合も亦全く分らない。

即ち、だから雲右衛門とお濱との交渉はあくまで特異な「藝」の「絃」の世界に出発し、歸着したものであるであつて、單なる情痴の問題にのみ解釋したならそれは大いなる間違ひなのである。

なればこそ、その死に際しては雲右衛門、一夜を亡骸と語り明かし、泣き明かし、袂別してゐる。

現に、早川燕平など、この點を、いつも不満として筆者に訴へてゐる位である。重ねて云ふが、此は青果翁の罪ではない。

故人天民氏がかく信じ、かく語り傳へてゐたのだ。その點を筆者は、故人に責め度い。天民氏の考へ方は、餘りにも貧困な正義感以外の何者でもないからである。

今回、この稿をなすに付いて、何年振りかで筆者は、戯曲「桃中軒雲右衛門」を

読み返して見た。愉快かつた。先年、讀んだときより、はるかにジツタリと親しめた。強ひて妄言を許させていただけなら、

『それなのに、それなのに……（涙聲になりて）世間はあれの成功と共に、おれを完全なる道徳者、完全なる人間と見ようとする。完全なる人間に作り上げようとする』

と云つた風な、へんに近代的憂悶を抱いた人間として扱はれてゐること位であらう。

現實の雲右衛門は、決してこのやうな用語で、このやうな惱み丈けは持たなかつたであらうと信ずる。

この筆者の、天民氏への多大の不满を、一日私は、そのころ先輩として出入してゐた小島政二郎先生に、訴へた。先生は一つ一つ同感され、共鳴された。殊に、雲右衛門がお濱事件を悔いてゐないと云ふところに至つては、座蒲團を滑り出されむ許りにして賛成された。

それから二年ほどして筆者は、三河家梅車に付いて、また、九州時代の雲右衛門の項で説述したところの材料をば、ことごとく先生に提供した。雲右衛門嫌ひの筆者には所詮描けない材料であつたし、反対に先生はなかくの雲ファンであつたし。

やがて支那事變一年。最初の従軍文藝家として九江方面へ出發されるころ羽田から飛行機で出發されるその朝まで、先生は、この小説を熱心に書きつづけられた。

それが雑誌「日の出」へ三回連載され、いま「ちちははの紋」へ收められてゐる「山ならば富士」である。

この小説の第一回が發表されたとき、岡戸平君は手紙を寄せられて筆者の代作であらうと云はれ、「人の目はごまかせぬものなり」と書いて來られた。また近く鈴木氏亨君は此を先生の「一枚看板」以後の傑作とされ、「君から材料がでてゐるのだらう、あの材料は到底親しくその道へ入つてゐるものでなければ——」と云はれた。全くあのととき曲師に付いての挿話の末に至るまで、筆者は知る限りの材料を

喜んで提供したものである。

が、それにしても筆者は、この「山ならば富士」の小説としての成功を、夙に固く信じて疑はなかつた。

それはあの座蒲團を滑り出して來て感激されたあの日の先生の姿をば忘れることができなかつたから。さうしてもう一つ云はせて貰へるなら、「海燕」「心の青空」の作者にはこれこそ乍らにして活寫し得る打つて付けの好材料であることを信じ切つてゐたから。

## 第二章 明治末年篇

### 蠟管蓄音機の浪花節

本邦最初の蓄音機専門店は、浅草観音境内、薬師堂脇の野天に於て開業された。所謂、蠟管レコードを、ゴム管にて聴取させる。明治卅二年六月以後のことである。薬師堂脇の日溜まりに浪花節の藝人の名がいろ／＼紙に描かれてひるがへつてゐたのをいままざ／＼目に思ひ描くことが出来る。筆者七、八歳。明治四十四、五年のことであるから、浪花節全盛期だったのであらう。

山口龜之助氏の「レコード文化發達史」にこの蠟管時代の浪花節曲目が細別されてゐる。

『中山安兵衛。赤垣源藏。大岡政談。五寸釘寅吉。赤穂義士。鍋島猫騷動。雷電小野川。國定忠治。安中草三郎。宮本武三四。天一坊。桂川力藏。幡隨院長兵衛。檜山大作。明石仁王。宮本左門之介。五郎正宗。櫻川五郎藏。御笑。山中鹿之助。鼠小僧。姐妃お百。河内山宗俊』

以上である。

御笑とあるのはサゲのついた低調のユーモアを主旨とする外題附で、此は、阿呆陀羅經の殘光のハッキリ滲んでゐるものである。

『折角の奏曲者の名を逸した事』を、山口氏は遺憾であると云つて居られるが、先年、筆者が鼈甲齋雲龍（林伯猿の舊師）と云ふ老浪曲師から親しく聞いたところでは、この雲龍、蠟管吹込を一手に引受け、先方の望むがままに、重松の、愛造の、樂遊の、虎丸の節真似で吹込んでゐた。報酬は蠟管四、五本で、二圓貫つたり、三圓貫つたりしたと云ふ。

口演者の名前を、明記しなかつたわけが分らう。

が、山口氏の記述を見ると、吉原藝妓のメ壽（のちのメ治）、由喜、義太夫の昇太夫など、正身正銘の本人も吹込んでゐる。

すべてがすべて物真似許りだつたわけでもない。恐らく浪花節のみかうした方法が取られてゐたものなのであらう。

### 圓盤初期の浪花節

明治卅四年には英國グラモホン會社が渡來し、築地居留地のメトロポール、ホテルに於て吹込を開始した。もはや片面盤が發明されてゐる。従つて以後の浪花節の歴史は、特殊の例外人を除いて、ほぼ圓盤と並行して今日にまで至つてゐると見ていい。

但、このときの浪花節は只一種で、初代浪花亭愛造のみ。

同卅八年には米國コロムビア會社が渡來し、ここでは、浪花亭重松（のちの木村

重松、二世重勝）が吹込んでゐる。

このコロビア系の天賞堂レコードには、同じころ、鼈甲齋虎丸の吹込がある。「四谷怪談」を得意とした先々代虎丸とおもふ。

同卅九年、獨逸ベカレコードが進出してゐる。

末廣亭清風、吹込んでゐる。現、新宿末廣亭主人であらう。

同四十年前後、ヴィクターレコードは、末廣亭辰丸を採上げてゐる。例のハイカラ辰丸である。

同四十四年には、一心亭辰雄、浪花家小虎丸、桃中軒雪平とあり、雪平は「雲平」の誤りか。小虎丸は關西節で、「日本のカールソー」とポスターへ歌つた男。この人のニッポノホン両面盤へ吹込んだ「千兩幟」を筆者所藏してゐるが、往來を駈出して行く女人の描寫に「赤いおこしを出しまして」と云ふところがある。ひざいカールソーである。

同四十二年から四十五年へかけて、日米蓄（ニッポノホンの前身）が、三河家圓

昇、一心亭辰雄、東家樂遊、吉田福松、浪花家小虎丸、日吉川秋水、京山小圓次、浪花亭重松、吉田奈良丸、吉田一若、吉田小奈良、桃中軒雲右衛門入道を網羅してゐる。

同四十五年の獨逸ライロフォン（三光堂）は、

桃中軒雲右衛門入道、敷島大藏、東家樂遊、樂鷹、玉川勝太郎、京山圓吉、水月、恭奴、木村重友、三河家圓車、悟樂齋三叟、望月雲昇、妻川小勇、吉川小島、高橋君子、浪花亭愛造、べ太を數へてゐる。

べ太はもはや二代目である。

何れにもせよ、當初、最も數少かつた浪花節がかくもおびたゞしい人員となつてゐる。

浪曲の全國的普及のほど、知る可きであらう。

## 明治末年の關西浪曲

### 吉田 奈良丸

今日の大和亟、先代奈良丸は二代目である。

が、大和亟の奈良丸、雲右衛門と共に天下に唱はれたので、世間では此の人を初代のやう、考へてゐる向が多い。

二代目奈良丸は、十六才まで花川若力と云ひ、旅廻りの祭文語りであつた。泉州箱造村の座敷興行のとき、縫ひ物を習ひに來てゐた村の娘と懇ろになつた。

娘は、祭文よりも浪花節に成つて呉れ、さうしたら自分は三味線を弾き、一生、夫婦として暮らして行かうと云つた。

間もなくこの娘との仲は生木を割かれ、末遂げずして終つたが、彼は娘との誓ひを忘れず、初代奈良丸の門に投じた。

それが浪花節界への發足である。

奈良丸の東京初出演には「日本一、吉田奈良丸」のポスターを、市内電車の中や辻々に場げた。此が東京の浪曲家の絶對反感を抱かせ、東京側の大家は何れも門人に命じ、このポスター剥ぎ取りを命じた。竹の棒を携へて電車へ飛乗りし、このポスターを叩き落したものです——と、今日の春日清鶴は語つてゐる。清吉門下の一青年だつた彼清鶴は、このポスター剥ぎ取り運動の華やかな闘士だつたのであらう。

此が、奈良丸の「日本一」事件である。

それ程の人気であつたから、明治四十二年土方伯の盡力で華族會館に於て奈良丸は、「七卿落」を口演してゐる。

當時の會館は三味線の使用を頑強に遮り、雅樂、能以外すべて下品の演藝と蔑視してゐたのであるが、土方伯は猛然と押切つて奈良丸を登壇せしめた。

華族會館へ三味線の進出が得られたのは、じつにこの日以後のことである。

奈良丸の節調の特色は、優美さにあつた。また平易さにあつた。雲右衛門など、

ちがつて、いかにも俗耳に入り易く、容易に誰にも節真似ができるところにあつた。

例の「七重八重咲く九重の、花の都の空よりも、勅使が幕府に御到着……」と云ふ

「殿中刃傷」の一齣など、路行く樽拾ひの小僧までが愛誦した。

従つて彼のレコードは、飛ぶやうに賣れた。レコードの賣行はまた未知の奈良丸ファンを獲得した。輪に輪を掛けて、人氣は騰つた。のちの二代目樂遊、今日の廣澤虎造の盛觀をおもへばいい。

雑誌「レコード」大正十二年五月號に、大和亟の奈良丸は、

『私が蓄音機に吹込を致しましたのは日本蓄音機商會が開業して間のないこと  
(中略)「南部坂雪の別れ」「赤垣源藏徳利の別れ」「大石山科歸り」「神崎與五郎  
東下り」等(中略)全國の津々浦々寒村僻地に至るまで私の名の擴がりましたのは  
全く寫聲機のお蔭だと有難く思つて居ります』

と語つてゐるが、全くの素晴らしい賣行。日蓄の工場では二部交替制で漸くその製造が間に合つたほどで、今に會社の庭へ奈良丸の銅像が建つであらうとさへ噂され

た。

奈良丸吹込種目は明治四十三年に、「赤穂義士討入」「義經安宅落」「赤垣源藏」「殿中刃傷」「大高原吾」「南部坂雪の別れ」があり、同四十四年に「間重次郎」「大石山科歸り」「曾我兄弟卷狩門出」「神崎與五郎」「天野屋利兵衛」があり、同四十五年、「赤垣徳利の別れ」「鹽山伊左衛門」「義士最期」「大石主税中仙道下り」「神崎後日物語」「神崎東下り」「南部坂戸田局」「淺野内匠頭最期」「毒饅頭」「須磨の浦風」「中山安兵衛生立」「義士引揚」「木村長門守」がある。四十五年の吹込には、一門の一若、小奈良、美芳までが參じてゐる。大正初年の渡米中、彼地に於て吹込んだ圓盤の中の異色篇に「亞米利加土産」「リンコルン傳」がある。

奈良丸の臺本は桑野桃華氏が筆執つてゐた由であるが、ここには「淺野内匠頭最後」の一齣を抜萃して見よう。

八時に歸る鳥さへも、  
哀を添ゆる誰そ彼れや、  
いづくの寺に鳴るやらん  
諸行無常と響くなる  
鐘の半に廊下口、  
ギイーと開いた御内より  
伊達の織部に伴はれ  
徐々来る長矩公  
色蒼褪て頬は凹み  
鬢も其儘で水色無地の御上着  
無紋の上下は死装束  
一足宛に消へて行く  
露の命ぞ 果敢けれ



また「赤垣」徳利の別れの一節も、

冬の日足のいと早く

光りもなくて消え行けば

薄くなりぬる山麓へ

かへる鳥の聲さへも

常に變りて哀れなり

ほど、明治中期の新體詩調とおもへばよからう。江戸の鹽山屋敷の上空を飛ぶ鳥に「山麓」はちと大袈裟におもはれるが、寶曆天明期の江戸を扱つた圓朝の「累ヶ淵」で根津から小日向までを「山阪越えて」と宗悦が云つてゐるを見ればそれ以前の元祿期なら「山麓」もいいかもしれない。（勿論この作者なり奈良丸なりはそこ

まで意とはしなかつたゞらうが）しかし、いづれにもせよ御人來調の浪花節の歌詞に比べると、此は劃期的に上品である。優美である。この美文をば奈良丸は、語らずして、美しく歌つた。大衆は只管、恍惚と聞き惚れた。その感激の氾濫が、かの笹やふしの流行となつた。俗に云ふ奈良丸くづしである。

「笹やさしく笹やさしく、笹は要らぬか煤竹を、大高源吾は橋の上、浪花節『あした待たるる寶船』」

但、この流行は大正三年。浪花節の流行歌化としては、三河家圓車のごんく節に遅れること數年である。

### 京 山 小 圓

京山小圓は、雲右衛門、奈良丸と共に、當時の三巨人としてその名高い。

かの京山恭安齋の門弟で、京山派を大ならしめたる随一人である。

小圓は傍ら、頗る義太夫にも長じてゐた。京都のオリエントレコード（大正年間）

には、この人の餘技として「三勝半七酒屋」のほか、二、三の義太夫レコードが發賣されてゐる。従つて、この人の浪花節には、最も關西藝の半面を代表する重壓さ暗鬱さがあつた。歌ひ尻りを、殊更に一楷音、ガクリと陰に落す。あすこに義太夫の重量感が感じられた。

筆者は、この人の浪花節に、「愉しさ」を感じなかつた。「明るさ」がなく、「吐く」呼吸がなくて「引く」呼吸許りだつた。その息苦しさが何とも耐らなかつた。同様の感情を、時として義太夫の上にすら感じる筆者には「小圓」を味ふ資格はないのかもしれない。

明治年間の、小圓吹込のニッポノホンレコードに、「赤垣源藏」「明智左馬之助湖水渡り」「一の谷」「神崎與五郎」「佐倉義民傳」「兒島高德」「横川勘平」「曾我兄弟」「河内山宗俊」「堀部安兵衛」「櫻川五郎藏」「常盤御前」「倉橋傳助」「勘進帳」「辨慶五條橋」がある。

みな小圓の金襖味感のもの許りであるが、中に「櫻川」や「河内山」のあるのが、

異である。

あの重壓感の小圓の「藝」が、いかなるお數寄屋坊主を表現したであらう。聴き度いとおもふ。此が笑止のものであつたらそれは小圓として當然の結果であらうし、萬々一、これが水準に達してゐたら、筆者は小圓に對し、もう一ぺん考へ方を變へる必要がある。

大正改元直後には「乃木將軍」書下ろしを十面吹込んでゐる。

〽嗚呼偉なる哉乃木將軍

生きては武士道の權化たり

死しては護國の神となる

げにも尊き言の葉に

よし行く道は遠くとも

花ある方を辿りなん

人に待たるる身にしあらねばと

自筆の和歌に美しき

姿はそれとあらはれて

大和心の山櫻

散りても後に香を残す

乃木御夫婦のいさぎよき

殉死は年の名にしおふ

大いに正しき初の秋

日も高き菊月の中の三日の夕暮に

神去りませし大君の

御跡慕ひて我はゆく

されども出でて何時までも

歸ります日無しと聞く

今日の御幸は悲しきと

残し給ひし筆の跡

見れば涙のはらくと

空に知られぬ秋雨は

誰が袖とでも濡れざらむ

と云ふのがその冒頭の歌詞である。

義太夫系統の彼、小圓の持ち味が大いに發揮されたものには、「佐倉義民傳」がある。今日その作詞を見ると「義民の木内宗吾氏は」など、昔の「浮かれ節」をおもはせる文句のあるのが幻滅だが、甚兵衛渡しなど、大いに歌はれたものである。

小圓の死は、昭和三年十月卅日。

京都市室町通り一條上る自宅である。

胃癌切開手術後、没したもので、行年、五十二歳。

十一月二日、北野宥清寺に於て告別式が営まれた。

最後の語り物を、同年七月十四、十五日の、京都南座に於る「赤垣源藏」とする。

この小圓にも大正初年のニッポノホンに雲右衛門の「近世浮世表裏」と軌を一にする「二十世紀」があるから紹介して見よう。演歌の「ワンダーワールド」をおもはせるものがあるが、此又一種のまくらだつたのだらう。小圓の方はそれにしてもごんな節でやつたのだらう、小圓や雲右衛門の藝風にして尙且時にかうした諧謔を扱つたところにそのころの浪花節らしさがある。否、生涯、ある一部には必らず此を扱つてゐなければならぬ宿命の浪花節が、このころは全部無意味な上品に墮して、しまつたのでつまらなくなつたのかとも考へられる。

『進み行く世にも時にも遅れじと、開けて匂ふ花競べ、自由自在に君ケ代を、一寸行くにも自働車や電車自轉車汽車汽船、姿見えねご心をば述ぶる無線電信機に居ながら語る電話機、今朝見し人も夕には百里隔てし旅の空、今日ロンドンの花を見て明日はシカゴや巴里の月、セントピーターズブルグの月に遊びし友も呼ぶ、支那の北京の宿も夢、世界一週空中旅行、夢想兵衛や孫吳空、昔咄を今爰で實地を見せ

る世の中に、學術技藝に備はりし、四方の諸君に僕が、無學無才の片語も、人道鼓吹を目的に、語る吾人の蓄音機』

### 京 山 若 丸

雑誌「食道樂」座談會「浪花節を語る」に於て、先代鼈甲齋虎丸は、京山若丸と左の會話を交はしてゐる。

鼈甲齋。大阪では新作物は絶対に駄目です。てんでやらせない。これは地元の藝人の罪だな。若丸師匠をおいて恐縮だが。

京山。と云ふより、お客がてんで聴かないのだから仕方がない。お客が古いんですよ大阪は……。

その新作物歓迎せずと云ふ大阪に於て、デヴィウ以來、先年の隱退まで、新作物

一點張りて大家の椅子を占め通した京山若丸は、まことに偉大な存在としなければならぬ。

しかもシットリと品好く人物情景を如實に表現し得たるに於ておや。

若丸には「折紙附の乃木將軍」あり、「江藤新平」あるが、明治四十一年六月十四日の中外商業新報を見ると、

『浪花節流行の今日、本家本元の喉は斯くある者ぞと關西より押上る者引きも切らず、流石に江戸つ子も少しく喰ひ飽きの態にて、奈良丸先づ去り、雲漸く西に下りたる折柄、又もや京山若丸新派浪花節の銘を打つて本郷座にて花々敷く開演したり。講演振には別に新機軸と認む可き點なけれど、水陰作空中飛行機と云ふ新しき中に新しきを撰びての大奮發殊更に耳新しく、大阪上りとしては言葉の區別に注意とゞきて、人物の活躍に心を用ゆるは到底雲などの及ぶ處にあらず』

此に據つても、若丸は終始、新作浪曲の完成に盡瘁してゐたことが知られる。東にハイカラ辰丸、西に京山若丸を以て、所謂文藝浪曲の二大主動者としてよいであらう。

らう。

この「中外」の批評家は誰人であるか分らないが、「言葉の區別の注意」をほめ、「人物の活躍」をたたへてゐる。若丸の正鴻法の「藝」であつたことが偲ばれる。そして、「雲などの及ぶ處にあらず」と云つてゐるところを見ると、この人も半眠氏同様コケをどかしの表現を嫌つた人であらう。

一心亭辰雄（服部伸）の談話には、滅多に他をほめない雲右衛門が、若丸丈けは名人として、一目も二目も置いてゐたと云ふことである。この中外の「批評」のいい加減のものでないことが分る。

『新談専門であつたため、奈良丸の半分も澡がれなかつたが、態度好く聲好く節好く會話好く、單に浪花節としての名人でなく、他の藝界の汎ゆる名人の中へ伍しても寸毫も退けを取らない至藝と、その道の人々は絶讃してゐました』  
こんなにも一心亭は禮讃してゐた。

最前の「食道樂」座談會には、若丸自身の浪花節への愉快な抗議があるから、おしまひに紹介する。下品な浪花節を極力排斥してゐるところに、この人らしい全面目がうかゞはれる。

京山。よくぞ御辛抱下さいました、と云ふあの文句は嫌だね。實に嫌だ。あの上へ未だ死んでも御恩は忘れません、と云ふ文句を附ける人がある。(皆哄笑)

### 關西浪曲の速記本進出

明治卅三年、大阪岡本偉業館發行の速記本目次を見ると、浪曲家の口演にかかるものが多々ある。漸く浪花節が講談の領域へ突入して來た世相と見ていい。

廣澤虎吉口演、井下士青速記にて、「斑鳩平次、高浪八郎、俠客千葉喜太郎、豪傑後藤又一郎」「雷電」「軍神廣瀬中佐」「櫻木お蝶」「岩見重太郎」「天下茶屋」

「宮本左門之助」がある。

岡本鶴治口演に「玉川お芳」「肥後お辰」「禁出沖三郎」「大鹽」がある。

京山小圓口演に「清水次郎長、大政小政、鬼面山谷五郎」と云ふ奇妙な演題のものがある。小圓、この種のものを読んでゐたのであるとすると、河内山の口演も宛ちに不思議ではなくなつて來る。さらに「伊賀越後日・荒尾秀丸」がある。以上いづれも井下士青速記である。

以下は山田都一郎速記にかゝる。

虎吉のもので「久田新十郎」「轡屋庄兵衛」があり、鶴治のもので「掛川大評定齋藤大八郎」「同・北條太郎」がある。

廣澤當昇に「武士俠客・根來半藏」があり、「明石騒動・尾張傳内」がある。後者が「明石の切捨」である。

中川伊勢吉には「豪傑山形重助」がある。

明治卅九年、大阪此村欽英堂の發行書目には、井下士青速記にて、吉田奈良丸の

「豪傑金森源太郎」が、廣澤虎吉の「俠客博多五郎」がある。「金森源太郎」が大和亟の奈良丸とはおもはれない。此は夙に初代奈良丸の口演したものが版を重ねてゐたのかとおもはれるが、他日を歸し度い。

他に岡本鶴治講演、河合源三郎速記にして「天正三勇婦」がある。女豪傑大仇討と割註してある。

同年大阪中川玉成堂版には、廣澤廣三講演、井下士青速記にて「一休北國漫遊記」がある。吾妻竹造講演、吉田松菌速記「西國轡物語」「豊臣秀頼琉球征伐」がある。他に淺川富士丸の「永樂徳太郎」「熊澤左京」あれど、此も浪曲家ではなからうか。明治四十四年の大阪駿々堂の書目には、廣澤虎吉口演井下士青速記「黒田騒動」がある。

岡本鶴治講演「俠客仁田仁兵衛」がある。是又、おなじ速記者である。未だ／＼仔細に查べたら数多いことであらう。ところで、いま列舉した演題の中で、過半数以上は内容不明のものが多し。

かく亡びた作品の少からぬと共に、新作物も日に／＼殖えてゐるのであらう。うたた感慨無量である。

### 早川辰燕・燕平

早川派の祖に、初代辰燕がある。

名古屋に於て身を起した。

シンネリとした語り口で、「左り甚五郎」を得意とした。のちに燕玉となつて没す。

この人の門人の燕平が、のちの敷島大藏。明治末年、はや敷島大藏の名でレコード吹込をしてゐるが、燕平時代、已に聲名、師を凌駕した。晩年は榮華の夢さめて數年前落魄裡に死んでいつたが、「義士傳」に嘗て大藏の名は普ねく歌はれた。關西調の中へ、巧みに關東調を取入れ、まことに陽氣な藝風であつた。大藏門下の小

燕平が、今日の早川燕平である。燕平の見、二世辰燕を襲つたが、此又、最近、物故した。

### 港 家 扇 蝶

港家の名も、名古屋に起つた。

初代を港家扇蝶とする。のちの大夢である。

一方の大看板で、多少の文字もあり、頭腦のよい人で、何より「藝」の大きく、威壓するやうなところ、有難味のある浪花節だつたとつたへられてゐる。

「加賀騒動」「千兩幟」を得意とした。

晩年は、四谷杉大門の寄席を經營した。

門下に柳蝶、小扇蝶、小扇次がある。柳蝶の門から、先代小柳丸、打つて出でた。

### 明治末年の關東浪曲

石井研堂氏の「明治事物起原」には「浪花節の流行」と題して、

『浪花節は數年前までは下層の賤民の聞くものとしてありしが、明治卅九年頃には、相當の身分ある人々の顧る所となりて、勃然其勢を得來れり。同五月より、浪花節獎勵會とて、富士見樓にて毎月一回づつ開催（小樂・清風・虎吉・辰燕等）したりしが、之に對して浪花節研究會は、同七月江東伊勢平樓に於て第一回を開けり。演者峰吉、虎丸、辰燕等なりとす。四十年六月桃中軒雲右衛門大阪より乗込み、本郷座にて興行、滿都新聞雜誌の之を是非する甚だ盛んなりし』

この虎吉は吉川亭虎吉か。玉林晴朗氏の「文身百話」に刺青師たらむとして果さず、のち浪花節の大看板となつた吉川亭虎吉の名が見える。同一人であらう。

雲右衛門の本郷座出演を卅九年冬でなく、四十年六月としてゐるのは、再上京の



ときの誤りではなからうか。

山本笑月翁の「明治世相百話」は、雲右衛門東京進出時代に就いて、

『もつとも當時は既に虎丸・三叟・愛造・圓車・重松などの面々が東京の真中、神田や銀座の寄席へ乗だして向上の矢先』

と誌してゐるし、明治卅九年十月二日の東京朝日新聞にも澁川玄耳翁が、

『本年の流行の兩大關はエスペラントと浪花節、關脇以下は何であらう』  
と喝破してゐる。

いかに浪花節の黄金時代であつたかゞ知られるが、それにしてもエスペラントと浪花節とは、餘りにも對照が突飛で面白い。

そのころ、卑猥の故を以てかの源氏節の斷壓されてゐたことも一そう浪花節の流行を白熱化したと見る可きであらう。

### 玉川勝太郎

八九分と見て長講の勝太郎 横濱 雪人

かうした川柳が、雑誌「講談雑誌」大正四年六月號、近藤館ン坊選の川柳欄にある。

初代勝太郎は、青木勝之助を祖とする青木昇門下。青木勝太郎がその前名である。師匠青木昇は勝太郎の日露役出征後、その遺家族の面倒を見てやるに些か遺憾の點があつた。茲に於て勝太郎は憤然、青木の亭號を返却し、玉川の亭號を樹立したのである。

が、その舊師昇は晩年には勝太郎の前席を勤め、「黄門記」などを讀んでゐたが、光國公が當時流行の自轉車に打ち乗り、電信柱に衝突すると云つた風な、全くのナセンス浪曲であつた。晩年さうなつたのか、生來さうした藝風だつたのか、詳にしない。

勝太郎の藝風は江戸つ子の溜飲三斗と云つたキビくとしたもので、「金比羅利生記」「赤尾林藏」「越後傳吉」「天保水滸傳」「天保六花撰」「祐天吉松」を得

意としたが、就中、十八番は「清水次郎長」であつた。

勝太郎は故伯山、現下の貞山と兄弟分であつた位で、講談界との交り少くなかつたが、「次郎長傳」は伯山に先立つて原作者の松廻家太琉（京傳）に傳授された丈けあり、次郎長と云ふ一つの大皿料理を伯山と二等分して喰べてゐた感があつたと、小島政二郎先生、語つてゐられる。

「浪花節では勝太郎で」

故伯山もしば／＼高座に於て、かく大提灯を持つた由である。

さて藝風全體はキビ／＼としてゐたが、節調は樋口罔象氏の勝太郎口演「金比羅利牛記」の序文に據ると『新内に似た情緒纏綿』のものとある。故人の高弟で此も今は亡き新内調の小金井太郎がお家藝たる「林藏」の投げ節のやうな文句を、いつもの太郎の節で歌ひ廻したとき「勝太郎そつくり」の聲がよくかゝつた。以而、初代の節調はあの太郎の新内調のもつと／＼藝的に整理されたものと見ていいだらう。

勝太郎が二代目樂遊の當り文句たる、

〽雪折れ笹にむら雀

たとへ年期が増さばとて

けさの寒さにかへさりよか

を嗤つたと云ふ話がある。書いて見よう。

彼は決してその文句が不可ないと云ふのではない。

樂遊、この歌詞を「生首正太郎」に於ては夜半淀川の船中に正太郎が身をひそめてゐるとき聞え來る素見戻りの投ゲ節として歌はせ、「海賊房次郎」に於ても亦、石川島監獄脱監の夜の、風が持て來る投ゲ節としてこの歌詞をば流用してゐる。「五寸釘寅吉」に於ても亦同斷。

それを勝太郎はいけないと云ふのである。

あの投ゲ節は「八代騒動」に限られたもので、九段租橋に於て水野十郎左衛門が、通りがゝりの職人の着物をぬがせて丁ふ。職人、折柄の夜寒に慄へ上がつて

へたとへ年期が増さばとて

けさの寒さに……

と洒落れてうたふ。いかにもそこに江戸の職人らしい、洒落つ氣のほごが感じられた。即ち「八代騒動」以外に斷じて動かしてならないあの投ゲ節ではあると主張するのである。

傾聴す可き一家見とおもふ。

永らく向島に住み、住居の近くに玉川亭なる寄席を經營したこともあるさうだが、しじう釣が好きで、一錢蒸汽のとまるところへいつては釣絲を垂れ、釣の殿様と呼ばれてゐた。

その釣の殿様、あるとき大盃に二尾、主ぬしと呼ばれる大きなく鯉を釣上げ、何とも云へずゾーツとして以來、バツタリ釣を止めてしまつたと云ふ。

また任侠の氣風があり、市川に隠屯したある年の大晦日には、當時對ひ合せに住んでゐた後進木村某夫婦の顔色只ならぬを見て、百圓紙幣を興へてやつた。某はそ

の日、赤子を死なせたが、葬る可き金がなく、夫婦して世を憐み、近隣の松林で縊死せむとした。が、死の一步直前で、いま自分たちが命を終れば、誰がこの子の靈を弔ふか。僅にそれを思つて引返して來たものゝ、一錢半錢の所持金もなく、途方に暮れてゐたところ、意外の金品を恵まれたのである。嬉しさに後進夫婦は號泣した。

まことに己が得意の義俠談を、そのまゝ現實に移し植えたるごとき、活きたる人情噺ではないか。昭和十七年六月廿四日、當代勝太郎に招かれ、梅雨煙る一日を葛飾區細田町宗念寺に先代勝太郎の掃墓をした。門内左手には當代奇進するところの謝恩碑がこの日建てられ、その日はまた十七回忌でもあつたのだつた。浪花亭峰吉老や、美しい樂燕夫人などの出席あり、出水のあとのトマト畑つゞく畦道を、トコトコとながいかことかゝつてお寺まで私たちは歩いた。何がなし、いまもおもひでにのこつてゐる。

浪花亭峰吉

本名を、田代三吉。

東京深川東森下に生れ、十八歳にして浪花亭駒吉門を叩いてゐる。

いまの法政大學の前身、和佛法律學校へ通學、晝は古賀廉造、磯部四郎に法律を學び、夜は駒吉の寄席へ出勤した。今日、浪曲界切つての博學と云はれる所以である。

親が裁判官で

その子が泥棒で……

當時一世を風靡した峰吉のこの「強盜士官」の外題附は、扇子をかう壁に持つて机の上をトン、トンと突付きながら、飄々と歌ひ棄て、行く。

何とも風格のあるものであつた。

「強盜士官」は伊原青々園氏原作で、栗生透くりよこほるを主人公とする。

栗生は軍服を着て大磯方面に出沒、變想自在の怪賊であつた。

捕縛に及んで、その兩親が判明されない。

八方十方、取り調べたところ、何とそのときの裁判官が實父であつた。

實父は俄に腹痛と唱へ、この裁判を中止したが、間もなく自殺して相果てた。

全十五段に構成されてゐる。此が全篇の概略である。

同様の怪賊物では石川一口講演にかゝる「若松小僧北海奇聞」をも得意とした。

この外題附に、峰吉は、

沖の小島に雲雀が上る

の國木田獨歩の詩を取上げた。

他に峰吉の讀物は、「太閤記」「伊賀水月」「慶安太平記」「宇都宮釣天井」「幡

隨院長兵衛」以下、百二三十種ある。

新講談に轉じてからは専ら司法記者格を許可され、裁判所へ通ひつゞけて、「ト

ランク事件(山田憲)」「おはつ地蔵」「おはる殺し」「江連力一郎」「甘粕大尉」

など、いづれも十五段位づつ創作してゐる。

筆者は、峰吉晩年の高座しかしらないのであるが「櫻川五郎藏」など、いつも宵の口の高座で一杯傾けてゐるらしかつたりして、ほんたうの藝らしい藝にふれることができないでゐた。

ところが満洲事變勃發の秋、頭山滿翁の主催で、青山二山亭に於て、清吉、峰吉、辰雄の元老會が催された。忘れもしない、馬占山殺さるの號外が出た晩であつた。

峰吉はそれがうれしいと云つて、何べんも高座でそのことを云つては、折角、弾き出した三味線を

「とツとツとツと」

と押さへ、また馬占山のことを嬉んだりした。

さてこの夜の演題、「宇都宮釣天井」のおいね與四郎の件りであるが、雀の宮の行列へ、おいねの父が直訴するあたり、金紋先箱美々しくも大練りに練つて來る華やかな行列の光景がマザマザ目に見え、じつに偉觀であり、壯觀であつた。

それにはあのセメの逞ましさ。

全く筆者は息を呑んだ。身體中を硬くした。

他の二元老に些かも劣らぬこの出來榮を見せ付けられて、往年の浪花亭峰吉のいかに燦き渡つてゐたかゞハツキリと知られ、喜悅せずにはゐられなかつた。

幸ひその雀の宮のセメの文句が、所藏の峰吉口演、松盛四郎速記「宇都宮釣天井」(三芳屋版)にあるから、引用しよう。

へ時は寛永十三年四月の十四日、徳川三代將軍家光公、いよ／＼日光御社參といふ、江戸御留守居は常陸國茨城郡水戸の城主で三十五萬石、水戸從三位中納言頼房卿、品川口をばお固めは、豊後森で十萬石、中川修理太夫殿、新宿口をばお固めは信州松本六萬石、松平丹波守、砂村洲崎の海岸を固めたるは、越前國今立郡鯖江で五萬石、間部下總守、千住口をお固めは、伊豫の宇和島十萬石、伊達遠江守殿で、江戸の見附々々卅六見附は、平時の場合は旗本三人お槍が三筋、非常の場合は旗本五人お槍が六筋、蟻の這ひ出る隙もなし……

かうしたところ、朗々と彼が吟んで行くとき、まことに一種の藝術的興奮をかんじないわけにはゆかなかつた。

末だ／＼かうした詞がこの三倍以上つゞき、行列の大小名の晴れ姿を、パノラマのごとく展開して行くのであるが、主要の部分を拾つて見るなら

へ先づ眞ッ先は、三つ葉葵金紋先箱二つ、紫伊達紐二段に下り、手振りの役人十三人、お里坊からお同朋が附随ひ、鐵砲五十挺あるが五十俵、長柄が五十筋、蒨黄縮縮長羽織の人達二側に居並び、間々にお徒士目付が附随ひ、引戸腰黒一段打上げ、網代のお乗物その中は、淳和獎學兩院の別當源氏の長者、徳川三代將軍家光公……とか、

へ曳馬二頭、一頭は召料一頭は召代へ、金のお茗榎油ちびんゆ箆たんが懸り、白奎呂摺高御長持一棹、三葉葵の紋を持し

とか、以而、全般を想像してほしい。

他に筆者はこの人の、おなじく三芳屋版「八百八狸」を藏してゐるが、此には長

谷川伸先生が序してゐられる。まことに珍しいとおもはれるから、全文を紹介しよう。

『友人浪花亭峰吉君が得意の讀物の一つである「八百八狸」を刊行する、世に謂ふところの速記本である、元來速記本の妙は其口演者の藝を知つてゐる者でなくては妙味を知る事が出来ない、その人を知らず速記本のみを讀むは興味の半ばを棄てるに等しい、近來の速記本は往々にして代作がある、代作は一種の偽作である、素より採るに足らざるものである、かゝる時に藝を知つてゐる者は一讀眞贋を判辯し得べきである。素より耳を主に眼を従とする對照に於て、演ずる藝と絶對に眼のみに與へる速記體とはその主要分に相違があらねばならない、亦相違をあらしめないやうな口演者ならば速記にかゝる力量がないと云へる、峰吉は其の點では立派に及第以上の資格者である。

「八百八狸」は作者が誰であるかを詮索した事もない、友人の篤學者相原熊太郎君の説に従へば一篇の創作であるさうである。實説が尊いか創作が尊いか内容次第

である。百千の實説もよく一つの創作にかち得ないのは、これ又今更いはずもがなである。此の點に於て「八百八狸」は民衆的創作として既に價值あればこそ幾多の年月を経て尙生命を確に握つてゐるのである、かゝる創作に峰吉君の藝を注いだ此の一篇は確に一年中何れの時に於ても同伴として善き一冊である、と云ふ。」

終りに浪花亭峰吉の近況を語るなら、神道、日蓮宗等の信仰厚く、聯珠五段の肩書あり、日本國旗會の理事であり、矍鑠として國粹的な諸事業に奔命してゐる。昭和十七年十月末日、筆者は淺草常盤座「笑の王國」に於る「人情大一座」昔懐しい淺草風景に於てゆくりなくも絶えて久しい峰吉の「親が裁判官で……」を親しく聴いた。聲こそないが昔に變らぬ高座振りでは思はず眼底を熱くした。この日のこと、一篇の隨筆にのこしておき度いとおもひつゝ、未だ果してゐない。

### 三 升家 一 俵

初代三升家一俵は、初代樂遊(悟樂齋三叟)の門下、前名を東家若遊となつた。故ありて地方廻りとなり、明治卅四、五年、再上京して、三升家一俵の名を以て獨立した。

小作り、ほそおもて細面の男で、此を三升家の宗家とする。

この門人一九。此がのちに二代目を襲名した。一九は、新聞小説などの浪曲化を専らとしてゐた。浪六原作であらうか、「三人書生」などが當り藝で、ポツリくと區切るやうな歌ひ口に異色があり、小味ではあつたが、巧いと謂はれた。

ところでこの宗家一俵について最近、和田芳惠君からいかにも浪花節の世界らしいその藝名の由來談を、耳にした。

それは當時北海道の一部落に住んでゐられた和田君の祖父があるときこの一俵の興行を引受けられたとき、

「どうしてあなたは三升家一俵と云ふ變つた藝名をなられたのか」

と訊ねたら、

「いや、私が大へん困つたとき、ある人から三升の米を貰ひました。落ちぶれて袖に涙のかゝるとき、どんなにくその三升のお米が有難かつたことでしたらう。どうやら一人前になれるやうになつて私はその人に、昔の恩返しに一俵のお米を返しました。いつ迄もくこの日のことを忘れ度くないとおもつて、三升家一俵となつたわけです」

と笑つて一俵は答へたと云ふ。

いかにもかうした世界の人たちにふさはしい報恩美談の本體を、義理人情の眞骨髓を、マザ／＼と輪切りにして見せられた感じではないか。

ところで一俵が三升の米に感泣したのは、ズブの若き日だつたのだらうか。

それとも故ありて（何の「故」だか知るよしもないが）東家若遊の名を返し、田舎廻りとなつたときだらうか。

私としては恐らく後者の場合と考へ度い。その方が、多少なりとも一たん世にで

かけてゐた人の御沈落になつた場合丈けにどうも人生的にも味はひが深い。本人としての感銘も亦ずつとずうつと深く、なればこそその記念すべき出来事をそのまゝ、藝名に、返り咲きしたのではなかつたらうかと考へられる。とするところの話、正しく一種の一本刀士俵入。即ちいつの日か私は小説にもかき上げて見度いと考へてゐる。

和田君の祖父が一俵と語つたのは、和田君が小學校三年位るときである云ふから、いまから卅年ちかくも前の話なのであるが、そのころの北海道の小部落で一俵、一圓の入場料を取り、餘り素人受けのしない濫い語り口だつたと云ふ以上、もうその時代の彼は餘程隠然たる大家の地位にあつたのだらうとおもふ。

### 春日亭清吉

春日亭清吉はかの春日井派の別流である。父親が三陸方面の旅廻りでその薰陶を享けて一人前の浪花節となり、やゝ中年から東京の組合へ加盟した。



この父親がなか／＼の道樂者で、しかもその父に仕へ清吉は稀に見る孝行者であつたらしい。先年、高座から彼はこんなことを云つてゐた。

「私もこの年まで浪花節をやつてゐますが、若い時分には高座で一生懸命唸つてゐますと、阿父さんが木戸の上りをみんな持つては吉原へいつてしまつて——」

モミアゲ長き清吉の顔は、明治のランプの灯影の下に見出される。今日ではちよつと得がたい尊い「顔」である。同時にこの人の高座様式も、嘗て一部の講釋師がやつてゐたやう、卓子の上へ種本をひろげ、讀み且つ語ると云つた風な古風のもので、これ又、他には絶えて見られないところである。

筆者が十歳前後のころ、清吉は今日で云ふアトラクションとして、淺草千代田館へ出演してゐた。はや、なか／＼の大家であつた。「蓮華往生」の一節の、今にして柳全であらうかとおもふが、物凄い竹藪の邊りへ死骸を埋める件りを聞いた記憶があるが、子供心にもその清吉の節廻しには、關東の浪花節特有の傳法さがあつた。

長ずるに及んで更めて清吉を聴き、その節調のなくなつてゐることをやゝ物足りなくおもつてゐたら、偶々村松梢風氏も同意見で、氏は清吉に質したところ、そのころの曲師がゐないので、あの節廻しが使へなくなつたとのことである。勿論、曲師にも據るであらうが、清吉その人の聲量もそのころよりは落ちたと見ていい。

この人、十八番の「野狐三次」では、大阪の城の番場でお糸が駕屋に手籠めにあはうとする、そこの息詰まるやうな場面が鮮かであつた。

最近、同じ「三次」の中で、彫物師こんこんの清次の件りをこの人から聴いた森三千代君は、江戸つ子の清次のこととて定めし五分のヌキもない男が飛出して來るかとおもつたらいかにも女から一分二分と貰つてゐるやうな唾棄すべき性格の男を描き出したので、全く感嘆してしまつたと云つてゐた。

近年、筆者が聴いた「開運小夜中山」「名刀捨丸」それに「國定忠治」のごうごうの紋次へ盃を返す件りなどはみな徒らに手堅い許りで起伏がなく、波瀾がなく、僅に四萬の伊三郎の弟分が長脇差を片手に、楮子の中段まで下りて來て身構へるとこ

ろに活きた描寫を感じたのみであつたけれど、この失望を金子光晴君に訴へると、同君は言下に云つた。

「清吉は道德の頹廢した場面の描寫でなければ駄目だよ」

玆に於てか、筆者は世に正確な藝評と云ふものゝ、いかに至難であるかを、つくづくと感じないわけにはゆかなかつた。ましてや、後人にその人の藝風の、そもいかなるものであつたかを傳へることの難しさに至つては――。

ところで、例外として道德的なものではあるが、筆者所藏のバールフォンレコード、「佐倉義民傳」甚兵衛渡し。此は、ありし日の鐵火な節廻しこそなく、寧ろその反對のやや暗く重く澁ささへ感じさせられる節調ではあるが、まことに堂々と四つに組んだる秀逸の演出である。千切れた雪が悲哀な宗吾の廻し合羽に吹付けて來る、櫓火にかざす宗吾の眸に涙が光る、雪の上を飛んで來る甚兵衛の跫音がサク／＼サクと耳を打つ、得がたい主従恩愛の日の景色をば描き出してゐる。

殊に、歌詞は自作であると聞が、なかなか巧い。

へここは下總印幡の郡

公津へ渡る眞間の渡し

正巳とふる雪に

脚絆甲掛　さんご笠

身には緋の風廻し

面態深く包まれて

商人風あきつての旅人は

誰岩橋の宗五郎

吹雪に笠を傾けつつ

河原づたひにザク／＼／＼

前後左右に氣を配り

田越しに見ゆる案山子さへ

捕手とおもひ轟く胸

バツと立たる川千鳥

空飛ぶ鳥も 妻や子を

慕ふて友を 呼び交はす

焼野の雉子 夜の鶴

子を思はぬはなきものを

まして人間煩惱の

絆を切つてふるさとへ

妻子を棄てにわざくくと

雪踏み分けて戻る身の

心の中やいかならむ

と云ふ冒頭には噴飯に價するところが少しもない。讀下していつて、その情景が  
アリアリ目に浮く文章となつてゐる。老來の清吉は特殊の愛好者にのみ至上のもの  
とされ、稀にラヂオなどで大衆に訴へても一向に尊重されない。それは一に近來の

彼の藝が手織木綿のやうな地味な色調を帯びて來てゐることに原因するのである  
が、その重苦しいしらべのなかに、この「雪踏み分けてザク／＼／＼」の「ザクザ  
ク」や、「バツと立つたる」のその「バツと」には、いかにも特別の感情を籠らせ  
た活々とした表現がある。

もう一つ、甚兵衛が怒つて小屋の戸を押開けるところをセメでやり、

へく／＼となる、氣短になる愚痴になる、思ひつくこと事みな古くなる

と此丈けの言葉で朴訥の老爺を描き出してゐるのも巧いが、トッ戸を開けて見て、

『ヤツ公津の旦那』

と愕くのを宗吾が「コレ」と押さへて、その呼吸のまますぐ、

へ聲が高い……

と歌ひ出す呼吸、また無類である。

清吉若き日に逸話がある。

例の二代目奈良丸の「日本一事件」の直後である。二六新聞社の後援で大阪道頓

堀角座へ出演するとき、

『日本一、春日亭清吉』

の緞帳をワザと造つて、關東浪曲のため、萬丈の氣を吐いた。

彼が聲調自在なりし日、關東側を背負つて立つた氣概のほごが、想像されるではないか。

追記——昭和十七年九月十四日、清吉急逝を、偶々私は宇都宮第一八百駒主催白衣の勇士慰安會席上、清鶴から聞き知つた。それから五日目の十九日、改題直前の都新聞紙上發表された左の記事を紹介し、心から故人の冥福を祈らう。

『明治、大正、昭和の三代に互つて浪曲史に貴重な一頁を飾る春日亭清吉（本名田中純吉）が、十四日朝胃腸病で急逝、六十五年の多彩な幕を閉ぢた。

清吉は浪花亭駒吉、二代虎丸、初代辰燕、一心亭辰雄の後を承けて雲右衛門の先驅を爲す浪界の大御所で、父春日亭長吉を師として廿代で一心亭辰雄を頼つて上

京、その人物は謹嚴實直、稀にみる親孝行者で藝界の鑑みとされてゐる。

×……十八番の讀物は「野狐三次」「佐倉宗五郎」「佐原喜三郎」「義士傳」「鬼坊主清吉」などで、格調の正しい藝風は多くの支持者を持つてゐたが、晩年は極めて不遇で本所の花岩、日本橋の喜扇亭などに出演してゐた

尙告別式は十九日一時から淺草區田原町一ノ一二の自宅に於て執行する

×……清吉とは最も親交の厚かつた元一心亭辰雄事服部伸は故人を追悼して語る私が駒子といつた廿位の時、品川の瀧澤亭に夫妻で逢ひに來たのが春日亭との初對面でした、それ以來大變私のやうな者を徳としてくれました、卅七、八年前になりますが亡き痴遊、伯圓、落語の米藏といふやうな方達と私が「自由演藝會」を組織しました所、春日亭は一世一代の親不幸をしますといつて入會してくれた事がありました、善惡共に親のいふ事は絶対に服従するといふ實に見上げた親孝行者でした』

京山恭安齋門下である。

小圓と云ひ、若丸と云ひ、大教と云ひ、恭安齋は門生から大家中堅を數多輩出せしめてゐる。

この人は生粹の上方の人で、關西節であり乍ら、若くして上京。その賣出しはこごとく東京に於てであつた。

品のいい節で、身體を動かさず「一休禪師」「水戸黃門」などの滑稽物を、常に語つた。それが普ねく江湖に迎へられるところとなつた。

十餘年前、高座を退き、「浪花節お千代」にてくる四谷山本亭を、京山亭と云ふ名前に改め、自ら經營に當つてゐたが此も亦廢業し、現在はずかに餘生をたのしんでゐる。

### 三河家圓車

三河家圓車は、梅車（一）はじめ門下の逸足である。

従つて、梅車夫人と逃亡したかの桃中軒雲右衛門が東京初出演のとき、本郷座の舞臺へ上げて成るものかといきまいたもの、その急先鋒は圓車であつた。

圓車のレコードは「恨の血の雨」なるものが、現、玉川勝太郎所有にかゝり、のち此は圓車未亡人に贈られたはずであるが、その圓盤は落語のマクラに用ゐられる小商人のギャグを中心に、所謂圓車調のどん／＼節なるものが點綴されてゐるのみで、何が「恨の血の雨」であるか一向に分らない。尤もこのころのレコード吹込は、今日の如く臺本は勿論、タイムなど計つて吹込むわけでもなく、全くの行當りバツタリであつたのだから、このやうな會體の知れないものもよく出來上つた。

圓車のどん／＼節に付いて語らう。

原歌は

〽向は下總葛飾郡、

手前は武藏の豊多摩郡、

間を流るるその川は

雨さへ降るなら水も濁々溢るぢやなれど

誰がつけたか隅田川 ドンドン

である。

つゞいて「駕で行くのはお軽ぢやないか」とか、「酒は元より好きではのまぬ、あへぬ辛さのヤケでのむ」とかど喧傳された。

圓車は、此を外題附の一種として歌つた。そして、文句の最後へいつて、樂屋でドンドンと大太鼓を鳴らさせた。それが大衆へ素晴らしくアツビイルした。

ごん／＼節と命名されたる所以である。

さるにても、外題附のかうした手法のみが人氣に投じて全國的に盛名を諷はれ、よく大看板たり得たなど、全く異例としなければならぬ。

そこで筆者はおもふ。

藤澤衛彦氏が「明治流行歌史」に據れば、ごん／＼節の流行は、明治四十四年であつたと云ふ。即ち雲右衛門本郷座進出以後、數年である。

東京の檜舞臺を踏ませるものかといきまいた雲右衛門は、劃期的な浪曲王となり、浪花節の世間的水準をさへ高からしめた。

圓車は、此を見て何と考へたらう。

そのときの痛憤と、發奮とが、低俗ではあるがごん／＼節の創案によつて、圓車は圓車なりの鬱を散じたと見てはいけないであらうか。

次に、ごん／＼節の最後に大太鼓を打ち鳴らすと云ふやり方であるが、此は、師、梅車が人心獲得の一方法として、冒頭、卓子を音立て、ガチャンと落し、アツと云はせたところで、本題へ入つていつた手段の、換骨奪胎と見てはいけないであらうか。

師匠の手法と云ふものは、ごんなに雨霰雪や氷をかくゞつても、必らずや何らかの方法で、弟子の「藝」の上へ、ポツカリ顔を出して來るものである。

故に、筆者はしかく、おもふ。

おもはずにはゐられないのだ。

以上二つ、我がごんごん節創案への小見とする。

一心亭辰雄

往年の一心亭辰雄は絞り出すやうな可細い聲で、

龍田川 ムリにわたれば紅葉がちるし

わたらにやきかれぬ鹿の聲……

と、卓子へ嚙り付くやうにしてうたつた。

しかも、この絶えなむとして絶えやらぬ小音で、關東節の約節を、いろ／＼さまざまに使驅して聞かせた上に、その高座振りは極めて端麗だつた。

徳川夢聲君のごとき、この人の高座を聽いて、話術家たらむと志したものであると云はれる。

さても、辰雄の藝の巧さよ。

「一心太助」が魚河岸の喧嘩に於る、おつそろしく巨きなリだらけ泥だらけの魚

を引摺つて行く若い衆の姿。半死半生の太助が目によつと映る、日本橋々上なる馬上の加賀爪甲斐守が勇姿。それは太助ならぬ聴衆の眸にもアリアリと映し出される。新堀端の仲間部屋では太助煽るの冷酒が腹の底まで浸み渡り、鮪のぬたの美味さがまた舌の上にかんじられる。

「は組小町」のお初が少うし酔つてよろけながら、戀びとの肩につかまつて座を立つてゆくなまめかしさ。美男の源次が纏かついで夜の闇の中を駈出してゆく勇ましさ。最後にお初が炎々と火の燃え旺る屋上で頭巾をぬぐとき、メラメラとその前髪の燃上る凄じさ。

「竹川森太郎」で、森太郎が父の仇敵の女を手中に入れ、お取膳で一杯やつてゐる。そこへ乗込んで来た仇敵をチロリと横目で見上げて、あざ笑ひつつ、しづかに鍋の肴を口へ運んでゆく快き太々しき。

「三日月次郎吉」の雪中の牛込見附を迅りゆく黒装束の面々が雪踏みしだく足音も真に迫るし、「糸平内」の山谷の某旗亭に於て藝者を手籠めにせむとする悪旗本

に、一喝を喰らす平内の疾風迅雷的めざましさも凄い。

「義士銘々傳」中の誰であつたか、悄然と戻り来る赤穂城外の朧夜には、銀燵しの月、中天にかゝり、いづこか五位鷺の啼きわたるかとおもはれた。

この人、聲量全く失はれ、新講談へ轉せむとして落魄悶々の數年あり。他人事乍ら憂慮に耐へなかつたが、本來不世出の名人藝はつひに再び江湖の絶讃するところとなり、今や講談界一、二の存在となりつつあるは、弘く日本藝界全體のため、慶賀に耐へない。

長谷川伸先生に私淑、藝名を服部伸と改めてゐる。

尙、筆者はこの人に對し、近來、さらに一つの新しい發見をした。

それは、殺氣漲りわたる修羅場を描出するとき、辰雄の藝は百尺竿頭一步をすゝめて、いよ／＼もの凄いまでに發展し、開花すると云ふ一事である。近來の話術界を見渡すとき、この人以上に白刃相搏つ戦慄世界を、「藝」の上へ移し植ゑた人を識らない。

至寶とたたへてよいとおもふ。

## 二代目 東 家 樂 遊

初代樂遊（悟樂齋三叟）門下の小雀が、二代目樂遊を襲名した。

世に、二代目樂遊と云へば、殺さば殺せ馬子の時……の勤王美談「小松嵐」を以て、その名、滿天下に喧傳されてゐる。事實、あれが樂遊人氣の最高潮であつたらう。

渡邊默禪原作「小松嵐」は、今日の福島縣塙町（石川郡と原作では呼んでゐる）の花屋と云ふ達磨茶屋の庭先で、酌婦奉公を拒む美貌の馬子お時を、赤裸にし、水を浴びせ、また打ち叩く。それを同宿の、勤王家小松龍三が救ひ出し、迫り来る白刃の林の中、一方の血路をひらいて落ちて行く。——元より「小松嵐」は長篇小説であり、浪花節としても十數段に構成されてゐるのだけれど、最もこの場面が人口に膾炙されたのである。かかる物語の梗概も今日にして紹介して置かなかつたら、





とき、偶々、所有の自動車はなんと一日に三人もの人間を轢殺した。此が轉落第一歩で、さしもの樂遊王國、瞬く内に崩壊しつくし、數年後には全くの裸一貫となつてしまつた。鷲印レコードには、電氣吹込以後の彼の作品が遺つてゐるが、往年の美聲が變りも變つて、世にも慘澹たる節調となり果ててゐる。筆者は、美貌を誇つた江戸節お紺が成れの果てを、戸田の河原に見る思ひがした。

今日も樂遊は悟樂齋を名乗つて健在のはづであるが、憾何不遇であるとおもふ。樂遊、得意の演題は、義士傳として「大石妻子別れ」「南部坂」「横川勘平」「天野屋利兵衛」「小山田庄左衛門」があり、幕末物として「岸本丈之進」があり、圓朝物として「粟田口」「鹽原」「牡丹燈籠」があり、世話物として「紀文」があり、新作としては「小松嵐」の他に、「官員小僧」「五寸釘寅吉」「海賊房次郎」「生首正太郎」などの明治探偵實話がある。

新舊硬軟自在であるところ、今日の一流浪曲家とは批較にならない。が、やはり仇なる彼の美聲に、最も相應しきは、明治の夜半を鳴りひびく呼子の

笛に、組んづほぐれつ格闘する俠盜怪盜の譚であつたらう。

宛ち筆者一個の好みとのみ、云へまい。

## 戸川花助

先代鼈甲齋虎丸は、

『初代愛造を花助が弾いた時分は、花助は一流の三味ですから、あ、云ふ具合に行けば、三味も結構なものだが、花助のやうな三味の名手はなか／＼出ないと語つてゐるし、松崎天民氏は、

『あの三味線は日本一です。三味線で二百五十圓の月給を貰つてたのはあれ一人でせう。寄せ浪引き浪の音を引きわけるんですからね。櫓太鼓の音を彷彿と絲で出すなんかは、あの人の獨特の藝でせう』と述べてゐる。

まことに戸川花助は、曲師として稀に見るの名手であつたとしなければならぬ。

・近世曲師の祖、戸川てるを師と仰いでゐた。大女で、口の大きい、不美人であつたが、その腕にかけては全く侮り難いものがあり、先代虎丸をその夫人が弾く前、この花助が弾いてゐた時代は、少し三味線が弾きまわると、流石の虎丸が全くへドモドして歌つてゐたさうである。

以而、巧さのほどが知れよう。

たゞ、怖しいことはこの花助の一生の足跡を振返つて見ると、花助の活殺自在の絃によつて、幾人かの名人上手が咽喉を害ねて、空しく仆れてゐることである。

花助、最初の夫であつた人は、かの節真似の元祖たる春日井文生であるが、先づ、この文生、妻女の三味線によつて弾きまくられ、弾きころされてゐる。脳へ疾患を來して早逝してゐるのである。

のち、浪花家辰造に嫁し、この辰造も可成の買れつ子であつたが、三味線のため咽喉を害し、それが原因で死んでしまつた。

次いで、初代浪花亭愛造を弾いて、これ又、腦病でころしてしまつた。もちろん、愛造は美男美聲で、不攝生のための腦梅毒も大いにあるが、花助の三味線は、さらにその病因へ拍車をかけて悪化せしめたと云ふのである。

木村毅氏の「都々逸坊扇歌」には、三味線の音で殺人罪を犯した女性が登場して來る。係りの役人は、果而、さう云ふことがあり得るか、都々逸坊扇歌を呼出して、質問した。そこで扇歌は、その下手人と對面させて呉れと云ふ。

以下、その下手人の談話である。

『遠い／＼大昔、天竺にあつたとか申す「殺生曲」と云ふ譜のこと、お聞きになつたことがございましたようか。(中略)私は何の苦勞もなく、あの方かたの脈の数をへて了ひました。(中略)あの方かたの脈の數と絃の間とを合せる工夫に、夜の目を忘れた事も、いく度かございます。(中略)お前がそれをひくのを聞くと、何やら不吉の氣に襲はれるが、しかし聞かないでゐると、やたらに聞きたくて堪らないから不思議ぢやと仰りました。(中略)茲ぞと力一ぱいにチンチンリンと撥をあ

てますと、何しろあの急調子な節でございますから、それにつれて、操り人形が貧乏ゆるぎでもするやうに、先方様は首を振つたり、顎をひいたり、目を見はつたりしてをられましたがおしまひの、松の葉のよにこんこまやかに、しいて歌ふや獅子の曲トシチン ツン ルーン ロンと収めますと、こちらの念願通り、がくりと倒れてもうそのまゝ目を開かれませぬ（下略）』

かくて、その女性は、見事に親の仇を討つたと云ふのである。

勿論、花助の三味線の場合は、相手のいのちを締めむとして弾きまくつたものではないが、餘りにも燃上る三味線のリズムは、合三味として相手の呼吸の一進一退と合致し過ぎ、魂と魂とは相睦み、相争ひ、往々にして歌ふもの、壽命を早める結果となつたのであらうか。思へば、空怖しいことである。

花助は、今日から十年ほど前、病没した。

晩年は大酒を傾け、淺草邊の二階借りをしてゐて、極めて悲惨の最後と云はれる。

### 第三章 大正年代篇

#### 大正年代の關東浪曲

田邊尙雄氏の「江戸時代の音楽」浪花節の項に、

『明治の末頃に非常の勢ひで流行した浪花節が今日では場末の寄席に』

云々とある。此は昭和初年の出版である。場末云々もちとひどいが、大震災直後の變態的好況は別として、大正中年から次第々々に、浪花節の中心的勢力は失はれて來た。

殊に、震災後は關東に於て關東節がめつきり凋落して來た。多くの關東節を以て鳴る人々が、合の子節、關西節へと轉向していつた。加ふるに、渡米後の王將木村

重友が聲量を失ひ、門下のホープ友忠また美聲を傷けて浪曲愛好家を失望せしむること多年であつた。今日の玉川勝太郎の如きも、前名次郎で、全く純關東調とは趣を異にした節調を弄び、重正の如きも正鴻法の描寫を捨て晩年の茶氣滿な藝風へと移つていつた。

此らをいろいろの原因に歸することもできないことはないが、要は、有爲轉變の世の中ゆゑと云はねばなるまい。

然るに昭和四、五年頃から、時代は再び關東節を要求して來た。大東亞戦争後の今日に於ては、關西節の人々すら高調子を競ひ、關東調を採入れつつある。

要するに、大正中年以後は、關東節の一大受難期であつたのだ。而も、今日そのころの浪曲界人名簿を點檢するとき、いかに現代の人々に上越す達人上手の多士齊々なりしかよ。

(但、大正震災後の好況期丈には、いかなる寄席も空前の活況を呈し、ために出演者の不足を來し、常には眞打たりしことのない中幹部以下までが主任を勤め、

それらの人々、ワリ(給金)を他の出演者に頒ち與へる術をしらず、ただ困却したと云ふ夢物語が生れてゐる。)

### 木村重松

『ある夜半の佃がよひの汽笛ふえの音か

君が嗚咽か 木村重松』

若き日の筆者にこんな稚拙の歌がある。

年久しく淺草阿倍川町に住んで、阿倍川の師匠と云はれた木村重松(二世重勝)は、初代重勝最古參の門人である。

重松の節は、まことに悲しく、やるせなかつた。嗚咽の一とふしであつたと云へよう。

ここで少しく筆者自身のことを語らせて貰へるなら、東京の下町育ちの筆者は昔、浪花節が大嫌ひであつた。紅葉山人や永井先生や芥川さん以上に嫌ひだつたと云つ

てよからう。

食はず嫌ひに輕蔑してゐたのである。

それを重松丈けはいいからせひ聞けと教へて呉れたのが、金子光晴であつた。筆者は金子の情熱ほごばしる詩作品には今日も傾倒してゐるし、あの風格ある愉快な人間そのものも買つてゐるので、素直に云ふことを聞いて聴きにいつた。淺草公園のある寄席であつた。はじめてそこで重松を聴き、綾太郎を聴いた。

ああ筆者は、あの日の重松の「新藏兄弟」の一節を今も忘れてゐない。

極めて江戸前の垢抜のした細おもてでその風貌も氣に入つたし、押付けがましくない力味返らない節廻しも好感が持てた。

若氣の至り新藏がある情痴の問題からお留守居役に首斬られさうになる。已に新藏は己の非を悟り、覺悟を定めて、往生際よろしく、いきなり素ツ裸になつて、ドデンと坐つた。そのとき重松は、新藏の彫物の妖しさ美しさを歌つた、白い肉を彩つてゐる藍と赤との刺青の國の人物風景を。

へ昔文覺上人が那智山の荒行で、正面には不動明王ましまし、右に背高、左にこんがら童子あり……

ここで仇に一と調子張上げて、

へ胸にや櫻のちらし彫り……

となか／＼に哀しいのである。すぐ筆者の前にゐた職人が、思はずしらす熱の籠つた聲で「名人」と小さく叫んだ。それすら今に忘れない。冒頭、をんなが女中に命じて新藏に粗忽のフリをして水を掛けろと云ふ、心得た女中が通りかゝつた新藏の、なんと頭から手杓でザンプリ浴びせてしまふ、その呼吸も自然で可笑しかつた。

未だ「新藏兄弟」では丹波屋善兵衛とあふ件りも、岐阜の彌太郎の生立ちのエピソード（膏藥屋になつての賭場荒し）も、彌太郎宅の小天狗の留の出入りもみな、洗鍊された落語の可笑しさがあつて面白かつた。小天狗の留が親分彌太郎と喧嘩したイキサツを、長々と茶店の親爺が新藏に話し、新藏が又それを長々と彌太郎の女

房に話す。全く同一の長丁場の話であるが、それを茶店の親爺がするのと新藏がするのでは、盡く呼吸を變へて話す。ここらも達人と云ふ可きであらう。

ただ一つ重松は侍がでて來ても、終始ふしぎに「べらんめえ」で應對させた。その點を邪道と云ふ人もあらうが、それを補つて餘りある藝の巧さ深さがあつて、救はれた。名人上手に有勝ちの陰氣さから脱却するため、彼はこの破調（べらんめえ）をあへて選んだのかもしれない。現、大島伯鶴が「三馬術」の中へトラックを迅らせ、先代桂春團治がちよん鬻で洋服姿の主人公を登場させても、それ以外のかりそめの情景描寫に、到底本修業をして來た人でなければ表現し能はぬところの秀拔さを見せて感嘆させてゐる。恐らく重松もそれであつたらう。

現に、「姐妃のお百」の秋田無宿の十吉の乗つた駕が死靈の崇りで千住の小塚原へ來てしまふ。折柄、烈しい稲光りの中に、ヌーツと大きなお仕置場の濡れ佛が浮び上がり、駕かき、それを見てウワーツと肝を潰す。そのとき紫銀色の電光の中に、ほんたうに無氣味な濡れ佛の姿をば、重松は見せて呉れた。

「慶安太平記」の怪僧善達の箱根越でも、青く美しい箱根連山の山脈が、手に取るやうにうかゞはれた。

「あれ見よ足柄山は今に浮氣は止まぬぞよ

けさの寒さに二子かゝへて薄化粧

と云ふあたりなど、絶誦であつた。

吉田城下焼討の晩、縁の下で破裂した地雷火の火線に慄へ上がる駄菓子屋の老夫婦の、いかにもしがない庶民生活。

また善達自ら火をかけた城下の焼跡を、そのうち通りかゝつて打ち眺め、

「何と云ふ惨しい姿であらう

と嘆いて、城下の人々へ心で詫びる一とふしには、焦土の春に揚雲雀なき、宛ら鳴長明が「方丈記」を讀むものゝ哀れがあつた。

「豊川利生記」「天一坊」「笹野權三郎」「安中草三郎」若いときには「國定」

「相馬大作」「鍋島の猫」「五郎正宗」「雷電」「成田利生記」も讀んだ。

晩年、悴重若丸に二代目を譲り、重勝を襲ひ、數年にして没した。

筆者は「重松」の名と藝とを生涯忘れないことであらう。

都新聞所載「重松の浪界四十年」に據ると、彼は明治十年神田於玉ヶ池、芝居衣裳方の次男坊に生れてゐる。本名、平木勘太郎。のち荻村家へ養子。五歳にして父に別れ、長じて小僧奉公にゆくこと、一年に十七、八ヶ所。いづこへいつても勤まらない。

最後に牛込の石屋へ勤めてゐる内、神樂坂若松亭へ急ぐ吉川小繁（のちの雲右衛門）の紋服姿に惚れ込み、己も藝人たれば紋附が着られるかと母の勘當もいとはず、小繁門下の繁之助となる。入門を許したのち、小繁は彼を浪花節の愛好者と思ひ、唸らせて見ると、てんで出來ない。許りか、未だ一ぺんも浪花節をきいたことがなかつたのだと分り、一驚するところは、まことに面白い。

それが轉々して重勝門下の重松となるのであるが、數年後、伯父分と争ひ、東京を賣る。熱海でさんざんの不入のため、前讀二人、ドロンしてしまふ。曲師の婆さ

んと唯二人、十國峠の險阪を越す。ここで婆さんが不平を云ひ出すので、「ごことだとおもふ、ここは箱根の山中だ」と芝居が、りで脅かすと、婆さん、音を上げておとなしくなるところも面白い。

三島へ行き、同宿の法界屋に流しのコツを教へられて魔窟を流し、「五郎正宗」三段語つて意外の祝儀に有付く。これで腕前を認められ、江尻の寄席から買ひに來られる。行つて見ると、熱海で逃亡した二人の前讀が自分を待つてゐたなど、いよいよ面白い。

ここで重松は「鍋島」と「相馬大作」を讀むが、「大作」のみ、素晴らしく受け、大入となる。ところがその「大作」、神通川渡船場まで讀みつゞけるとアトを知らないで、客に謝る。客、ガツクリ減る。忽ちお拂ひ箱となる。

此から二世浪花家辰之助一座に従ひ、名古屋へ赴くが、さんざんの不評。ここで、雲右衛門の章で叙べた舊師小繁の雲右衛門との再會と成るのである。

雲右衛門の温情で横濱までかへり、間もなく師匠重勝のところへ再歸して、これ



から克苦勉勵の生活がつゞく。小島亭徳三郎、寶集舎榮樂に引立られ、深川柳川亭で初看板を上げるが、初代愛造の反對で看板を下ろされてしまふ。愛造は、重勝の學識あり、常に己の無學を罵られたりしたことに私怨を抱いてゐたためである。

廿五歳にして、つひに正式に眞打となる。愛造とも和解する。(愛造は、此から間もなく發病、早世する)

阿部川町小林亭へ出演中、土地の仕出し屋の娘お初に想はる。即ち荻村家養子となる。やがて木村派、獨立す。

以來、新興木村派のため自重自愛して、蓄財に意を注ぐ。大正初年より七年。卅六歳より四十二歳まで關東側の大關の地位を保ちつゞく。四十三歳にして二代目駒吉頭取隱居し、最高點にて後任となる。

のち、米造、烏龍、海老松らと關東浪曲睦會を興し、自らその會長たり。

此から最後まで重松には、平和の日のみつゞいたと見ていい。終りに昭和十年ころの新聞記事だらう、重勝談と云ふのをいまノートから發見したから重荷へ小附

けとしておく。

浪界最年長者として肩書しての重勝談なのである。その一節に曰く

『私も今年は六十一、浪曲生活四十五年で、この商賣の最年長者ですがすよ、死んだ重正、今盛んに働いてる重年、重行、重忠、松太郎、重生等皆私が育てたんだ、もういゝ年だし、そろ／＼隱退しやうと思はないこともないが、若い連中がくだらねえのを演つてるのを聞くと後が心配で、それも出來ずかうして續けてるんですよ』

## 木村重友

木村重友は、川崎の生れ。

紺屋であつた。おなじ川崎生れの詩人佐藤惣之助氏の談話では、重友の紺屋は高い高い山の上にあつた。従つて、乾きの早いこと無類であつたが、餘り高い山の上なので、至つて頼みに來る人が少い。加ふるに浪花節が無上の好物であつた彼は先

づ重松門下たらむとして断られ、次いでその師重勝門下たるに至つたのである。この間の経路は、「雲右衛門以前」上梓のせつ初代重勝の章りを見ていたゞき度い。

重友の十八番には「河内山」があつた、「小金井小次郎」があつた、「稻妻お玉」があつた、「慶安太平記」があつた、「越の海勇藏」があつた。「菅谷半之丞」なども読んでゐた。

賣出し時代の重友には、牡丹櫻の濃艶無比なる節調があつた。大輪の八重櫻の花びらがフツクラひらいてゐる感じであつたとも云へよう。

それでゐてまた會話が本格であつた。

晩年にはすつかり枯れ／＼した節廻しになつてしまつたが、その残光のやうな哀れ一とふしのこつた聲を、からだを揺るやうにして絞り出す。そこにも何ともよさがあつた。

會話でクラキマツクスまで運んでいつて、

「あなたは何と仰言るとも私ア」

とここまで喋つて息を入れず、

へ我慢ができませんぬ……

とすぐ歌ふあれば、清吉などにもあり、太郎もやつたが、重友の一とツぶしが一ばん派手だつたわけ、こころよかつた。いま、僅に友忠が繼承してゐる。

「稻妻お玉」と云ふ開化毒婦傳は、誰の作物だつたのであらう、神戸でお玉が罪なき佳人を毒殺し、その四肢をバラ／＼に切断してトランク詰にする凄慘さ、怖しさに、筆者は息を呑んだ。

未だ浪花亭重友時代、三光堂へ吹込んだ「河内山」上州屋のレコードは、晩年のみを知つてゐる人々にせひ聴かせたい。此が重友かと疑はれる明るい美音で、

へ寄せては返す小波の

濱の真砂はつきるとも

世に盗人の種つきぬもの

こゝに天保六花撰

河内山宗俊が

豪膽録の一回

記憶いたせしを讀奉る……

と古調もて外題附を歌つてゐる。

この切り節（タタミコミ）も、いまは往年の關東節のタタミコミの生命を記録してゐる。元、關東節全體が俠なものであるが、殊に、あの早間になる最後の節調は、彌が上にも俠でなければならぬ。普通に歌つてゐて突如、<sup>いませ</sup>「殿様が戀慕して」と早間になるのであるが、字で書いて見るなら「殿イ」とゆつくりやつて「様が戀慕してイ」と急に速度がかかつて来る。しかも「イ」の語尾が入りながら、<sup>いませ</sup>「俠

にはなつても下品にはならない。蓋し代表的なる關東節の切り節であらう。  
震災直後吹込の「慶安太平記——牧野彌右衛門」（鷲印）も所藏してゐるが、清水八藏らが彌右衛門のあとを附けて斬りかゝり、壹岐殿阪で反對に投げ飛ばされる。そのまゝ、彌右衛門は後をも見ずに謠を歌つて、スーツと壹岐殿阪を上つて行く。青

青と月光の照る人氣ひしげない阪の勾配が、重友の引く呼吸づかひ一つで、移動撮影のごとくかう動きながら迫つて来る。まことに卓抜なものであつた。

重友、昭和十一年であつたらうか、腰溢血にて仆れ、久しく茅ヶ崎に病を養つてゐたが、數年後、没した。門下に友衛、友忠、友春（二代目重友）がある。

發病後、東寶名人會に於て己の代演を勤めた孫弟子若衛の傍らへ自らも病軀を押して鞭持つて佇ち、タクトのごとくそれを打ち揮つて、口演を補けた重友の姿には、涙ぐましいものがあつた。さらに病勢進んだ隠退披露の浪曲大會席上では、嘗ては先代虎丸と共に、三羽鳥と歌はれた盟友樂燕の挨拶の側ら、已に全く口の聞けなくなつた彼、重友、徒らに首を打ち振つて無言の挨拶をしたりした。

花やかなりし巨匠の一代をおもつて、此れ又、聴衆の涙をそゝつた。

木村重正

初代重勝が、船橋興行のさい入門したこの人は、前名を重子。

のち、重正と改名した。

ひどい醜男で、聲がしゃがれて、しかも文句がでたらめであつた。その上に、跋でさへあつた。しかもその醜男の中に愛嬌があり、しゃがれた聲の中に悲哀感が満ち溢れ、でたらめの文句がはづしたやうでどこやら壺をはづしてゐなかつた。東京で先代横目家助平、大阪で先代桂春團治。この二人の「藝」の系列へ置く可き存在であらう、重正は。

助平も、春團治も、この重正も年少のときは凡そまつたうな、本格な修業をした。そして、それらをシツカリ身に納めた。しかも長ずるに及んで、その本格さを、自ら支離滅裂に打ち碎き、世にも奇妙奇天烈な藝境を開拓してしまつたのである。

重子時代の「霞のお千代」など、まことに本格の語り口であつたと云はれる。

その本格の日の彼の姿が、最後まで「ピストル強盗、清水定吉」には、のこつてゐた。だから、襟を正して、此は聴けた。

撫子の提灯を誂へに来て刑事に追はれ、人力車で逃げる蠣濱橋あたりの夏雲よ。

人形町の夜更けの路次に、目許り頭巾の按摩姿で刑事をまいて逃げ失せる清水定吉が肩置く霜の光りよ。

本所の家を出た定吉が湯島の牛肉屋だか、その隣家だかへ忍び込むまでの途中のプロセス——つまり泥棒に行く道中附丈けを聞かされて大そうおどろいたことがあつたが、それすら妙な云はれない慈味があつておもしろかつた。

それには重正の異様な顔に、そのまゝピストル強盗があつた、定吉の心魂が憑いてゐた、彼は定吉に魅されてゐたのだらう。

「ねえお客さん、此はエライ泥棒だつたよ」  
必らずかう云つた彼だつたんだもの——

いかに重正の歌詞がでたらめであつたか。

火の車つくる大工はなけねども、我がつくつて我がのる、石川縣出身の小川他

吉郎巡查が、ピストル強盜縛繩いさほしの勳

とこゝまでは語尾に哀しい餘韻を引いて、しやがれた聲で歌ふのだが、そのあとが、

「こりやいつか猿之助と小太夫が明治座で演つた、ちよつと當時あたしのほかに誰もやり手のない浪花節だよ」

と来る。まるでベラ／＼喋つてゐるやうに一気に云つてしまふのである。(しかも音階を外してゐない)さらに又、

「だからねえ皆さんおしまひまで聞いてお呉れよ」  
と来る。さうして、どんな事かでも思ひ出したやうに、

「調べましたる概略談を讀み奉る……」

とヤケな聲を振り絞つて、「アア草疲れた」とケロリとお湯を飲むのである。へんにすがれ、へんに頹廢し切つてゐる。

そのほか、

「通稱全く國定忠治」

とか、

「旅の疲れでア。ン。ヨが痛い」

とか、

「私も重子改め重正になつちやつたよ」

とか、文句は凡そ出鱈目であつた。

そのくせ腹が立つて來ない。

何か高市たかまちの祭禮の件りで、跛のくせに鱒掬ひなどを踊り出したこともあつた。道中になると「淺間出て見よ」の馬子唄をよく歌つた。歌ひかけて、

「雲右衛門さんは巧かつたねえ」

と、きつとかう呟いた。

約つひまるところ、明治末から大正初年への浪花節の一ばん卑しいところを盡く具備してをり、その卑しさがまた最大の魅惑となつて、キラキラ燦いてゐた人であつた

と云はれよう。

とても紳士淑女の前では聴かされない浪花節で、その缺點があればこそ、何より、愛さずにはゐられない世にも不思議な浪花節であつた。

人前には出せないけれど、愛してやらずにはゐられない落魄した親戚のおぢいさんと云ふ表現が、この重正に、適切であらう。

「大川友右衛門」「木曾富五郎」「相馬大作」「大前田英五郎」「國定忠治」など。

門下に、重浦、正かり、小正（二代目重正）あり。大酒で死んだ。  
昭和十一年ころである。

### 東 家 樂 燕

初代樂遊（悟樂齋三叟）の息である。

攻玉舎中學に學んだ。このときの同窓に吉井勇先生がある。校内のボートを漕い

で芝浦からすみだ川へ。共に、エスケイプしたことがあると、吉井先生の談片にあつた。

雲右衛門の藝に私淑し、陶醉して、その養子と成つたときは、桃中軒雲太夫を名乗つた。鷺印には、この雲太夫の名で吹込んだ圓盤がある。「木村、徳田兩中尉」の墜落慘死の哀悼歌ではなかつたかに、おもふ。

美當一調の大劇場進出を、さらにあすこまで發展させた雲右衛門は、演題に於ては一調系の時局物語を一向に取上げなかつた。優生學的に、それが樂燕の上に開花し、結實したと見ていい。

一調——雲右衛門——樂燕。

かうした系列が成立つとおもふ。

「召集令」「血染の聯隊旗」「橋英夫」「西南史」「正直車夫」「苦學の錦」往年の樂燕は、かうした上演曲目を持つた。他に「倉橋傳助」「村上喜劍」等、雲右衛門畑もあつた。我國最初の飛行機墜落の尊い犠牲者「木村、徳田兩中尉」の新作

もあつた。近年の新作には「石と兵隊」「筑紫博磨」などがある。後者は白井喬二原作の、例の愛國浪曲である。

が、これら樂燕の時局浪曲は、日露戦争以後、民主思想擡頭までの戦捷國日本の浪花節愛好者の血を、ごんなに涌き立たせたことであつたらう。雲右衛門の節調を、

もつと神経的に小味にしたもので、團十郎と吉右衛門の差違とでも云ふ可きか。

泣き節と呼ばれるその節で、 $\wedge$ 妻は病の床に臥し、頑是なき子は餓に泣く、賤が

伏屋』へ「召集令」の一節を語るとき、ほんたうに樂燕は目に涙してゐる。

その涙をば拳でこすり上げて、咳一咳。忽ち、樂燕の節調は、快速となる。

$\wedge$ 雲か霞か長蛇の道

着いた處が廣島驛

宇品港に碇泊する

運送船の便をかり

旭に輝く日章旗

風になびかせ意氣揚々

山なす浪も何のその

蹴立て蹴破り滿洲の

敵の力と頼んだる

南山さして進み行く

かうした軍歌調の行進譜は行進譜でまた、いかにも力強い日本軍人の體伍堂々たる進軍振りを表現する。決して表皮では歌つてゐない。

それには、人物を宛らに描き出すことも、今日では有数の存在であらう。

數年前、拙作品を水野草庵子君が脚色し、コロムビアスタヂオに於て圓盤化すさいであつた。

吹込直前、

「ちよつとお訊ねしますが……あの、ちよつとお訊ねしますが……」  
と樂燕が云ふ。

何か作品の打合はせであるとおもつて、あはてて椅子をはなれ、近付いて行くと  
豊圖らんや、それは主人公が警官に、

「ちよつとお訊しますが」

とものを訊ねてゐるところのセリフの練習であつた。

しかく樂燕語る浪花節中の人物は、眞に迫る、自然に迫る。  
忘れられない印象である。

### 三代目 鼈 甲 齋 虎 丸

二代目虎丸の門下の吉右衛門が、のちの三代目虎丸である。

近代に於て、この虎丸ほど、陽氣な、派手な、濶達な浪花節を、筆者は識らない。  
そこには些かの曇りもなく、些かの悒鬱も見られなかつた。故伯山や先代訥子に  
見られる景氣のよさである。

この景氣のよさを、流行兒であつた期間、虎丸は保ちつづけた。さうして、晩年

に、ややそれが變つた。そのことは、おしまひに述べる。

黄金期の演題に「安中草三郎」がある、「伊達騒動」がある、「佃の夜嵐」があ  
る、「左甚五郎」がある、「柳橋五人斬」がある、「春日局」がある。「日蓮記」  
がある。「鈴ヶ森」がある。

派手ではあつたが、涙も絞らせた。たゞその涙の絞らせ方が、あくまで伯山系の、  
線の太い、雰圍氣でなく、材料で泣かすと云ふ手法であつた。「左甚五郎」に於て、  
甚五郎の片腕を斬落して死なむとする日光大工が、それに先立ち、他所乍ら妻子に  
別れを告げる件りなど、十二分以上に涙をそゝつたものである。が、あくまで、そ  
れは、プロットの上で盛上らせて來る「涙」なのである。

快辯と云はうか、快調と云はうか、早間に呼んで行く所謂虎丸節なるものも、無  
類であつた。「左甚五郎」を諷ふに彼は、

「だ、い、甚五郎利勝が……」

と卷舌で歌つてニヤリと笑つた。



この巻舌が、壓倒的に素晴らしい効果を挙げたものに、例の「安中」千住の捕物がある。草三郎が捕手に追つ取り圍まれ、二字國俊の鞘をば拂ふ。あすこで虎丸は、「二字國俊」を「ニイクイトシ」と發音した。それがその場の緊迫さをマザ／＼と傳へた。

さらに、その千住大橋の岡つ引の扮へを、一瀉千里と歌ひ捲る最高潮に至つては、もはやこの人逝いて、模倣者すらも見出せない。嘗てダグラスフェアバンクスは途方もない高い柵を、何の苦もなくフワツと乗越えていつてしまった。あのやうな爽快感と驚異感とが、この虎丸の早間の節を聴くたんびに感じられた。曰く、

めくの腹掛井付きで、めくの股引徳利仕立、印絆纏が三枚重ね、白木屋自慢の三尺を、前でやつきりシャンと蜻蛉に結び、バラ緒の草履がオットあぶない突かけ履きで、絲織羽織を着流して、乙なところへ拳骨固め、宛ら千住の早がへり、ほろ酔機嫌の千鳥足、出合頭で橋の上』

これを一氣に歌ひまくつて、揚句にドーンと草三にぶつかると、白刃をざる、そこ

で、切り場となるのである。

かうした前人未到の潑刺さこそ、虎丸の眞骨頂であつたとおもふのであるが、戸川花助の三味線と別れ、花柳界出身の夫人を得て以來、虎丸は延壽太夫に清元を習つたり、望月太意之助に鳴物を學び、歌舞伎浪曲と銘打つて鳴物入りの「權太栗毛」「よもすがら檢校」「破傘恨小夜衣」「地震加藤」などを口演したりしだした。昭和十一年前後である。

此は、一つの試みとして大いにその努力には敬意を表してよいが、何としてもあの虎丸節を喪失してしまつたことは惜まれてならない。歌舞伎浪曲も、あくまであの節調はあつての上の鳴物入りであり度かつた。もしあの節を下品と思ひ出して廢止したのなら、矯角殺牛であつたと云はねばならない。さう云へば虎丸は昔から何彼につけて新人であり度かつたらしく、「ニツポノホン音譜文句全集」(大正八年増補)には「琵琶歌」が載せられてゐる。「不如歸」を讀んだのも恐らく同時代だつたらう。かうして絶えず新企畫にぶつかつて行き度かつた人だつたのだ。しかも

虎丸の眞骨髄は、つひにかゝつてあの「安中」の千住の捕物にあつたことを、本人は晩年まで悟り得なかつただらうか。誰か側近に質ねて見度い。

雑誌「藝人アバウト」大正十三年六月號、望月太意之助氏の「虎丸師を偲ぶ」の最末段に、

『(前略)今春も、寅に因んで何か書いてくれと所望したら、早速、得意の「張子の虎」に賛をして書いてくれた。

素直に出て來りや何わしじやとて

横にかむりを振りはせぬ

とう／＼遺物となつて仕舞つた。中野の邸宅の二階は名代の竹細工の豪壯な建物で、全部竹盡しで出來上つてゐて、襖は現代の漫畫家が名筆を揮つて「虎」を畫いてゐる。建築家の參考物となつてしまつた(後略)』

この中野御殿には、三百圓の獨逸鯉が泳いでゐた。徳川夢聲君の名隨筆「天鬼將軍」は、幻妖怪奇なこの虎丸屋敷を描破して餘すところない。

虎丸は、昭和十三年五月五日、伊豆伊東の延壽太夫別荘で急逝した。

鼈甲齋秀譽達道虎丸居士。

深川玄信寺に埋葬された。

追記。虎丸急逝當時の都新聞の記事が二つまたスクラップブックから發見されたから、紹介しておかう。

一つは「鼈甲齋虎丸師」と黒ワクのみだしをつけたもので、

『浪曲界の大御所鼈甲齋虎丸こと荒井三郎氏は、去る二日静岡縣伊東町伊東劇場に出演中卒倒同町高安病院に入院加療中であつたが、急性膽囊炎のため五日午後六時半逝去した享年五十四、遺骸は同夜同町の朝光寺に移し六日茶毘に付する筈

同氏は故鼈甲齋鶴堂(二代目虎丸)の門下で、廿五歳の時早くも三代目虎丸を襲名し樂燕、重友と共に關東浪界三羽鳥と謳はれた、晩年は浪曲に清元或は鳴物等を取入れて新境地開拓に努力してゐた、三羽鳥の一人重友の舞臺再起不能が傳へ

られる折柄同氏の死は關東浪界に一抹の淋しさを感じさせてゐる』

と云ふ報道的な記事。

もう一つはその後の夕刊讀物にでもでたものらしい大きな記事で、「虎丸らしき死」と初號活字で題し、その間に、前行を二號、後行を三號ゴシックで、

子供にのこす金もねえが、

それもさば／＼してゐていいサ

さらに一號活字で「臨終の床に淋しく笑ふ」とかうもの／＼しくかきだされてゐる。黒ワクの中には高田保氏を長面に引伸ばしたやうな故人の顔が大寫しに、その脇に「浪界三羽鳥の一人重友遂に起たず、今月下旬その引退披露が行はれる事になり、浪曲ファンに一抹の淋しさを感じさせてゐる折柄、巨星鼈甲齋虎丸が地に墮ちた」と序詞のやうなことが記されてゐて、さて、左の本文となつてゐる。虎丸最後の姿が可成クツキリと寫しだされてゐる記事とおもふので全文を掲出しておくとしよう。

『去る二日、豆州伊東町の伊東劇場で十八番「榛名の梅ヶ香」口演中卒倒、高安病院に病を養つてゐたが、五日の朝小康を得たので家人門弟等も先づは愁眉を開いたが、當の虎丸は死期の迫りつゝあるを知る如く、一同を枕邊に呼んで「決して喜んぢやいけねえ、今度は俺もいよ／＼世の中へおさらばだ、そこで言ひ遣したいのは俺れの財産だ、世間では虎丸は金があるやうに云つてゐる人もあるだらうが、面目ねえが一文もない、俺の貧乏な事は協會（浪曲）の副會長向山庄太郎が一番よく知つてゐる、あの男も長年劇界に身を挺して働きながら金は一文も持つてゐない、貧乏人を知る者貧乏人に如くはなし……サ、フン それもさば／＼していゝせ、遺産をめぐる醜い争ひなんてものはなしナ……」と淋しく笑つた。

結局それが遺言となつて傑物虎丸は、虎歳のしかも男の節句の五月、吹流す鯉のぼりの鱗音を聞きながら其夜の七時、眠るが如く五十四年の人生へ幕を引いたのであつた、故人が浪界へ遺した功績は今更云ふまでもなく「浪花節」を今日の「浪曲」と改めた主唱者は虎丸で、ツボラな反面に又強い興行責任を持ち、現に先月下旬、

日本劇場で雲月、虎造、酒井雲の三人會があつた時、二日目に雲が調子をやり出演不能となつた、其時虎丸は「三人會に二人しか出ないのはインチキになる、今後の浪曲興行に及ばず影響がおそろしいから、俺が穴埋に出てやらう」と自ら雲の穴埋を買つて出て三人會の面目を立て、やつた、虎丸の心情を知るに充分な例で、結局これが虎丸の東京に於ける最後の舞臺となつてしまつた譯だ、尙日本浪曲協會では、前記重友の引退興行で今月下旬、全国の浪曲家が東京に參集するを機に、虎丸の葬儀は最初の浪曲葬として之を行ふ事に決定した』

初代 天中軒雲月

年少にして壓倒的人氣を克ち得たものに、初代天中軒雲月がある。

「大石山鹿護送」とか「俵屋玄蕃」とか「南部坂」とか「赤垣」とか「五郎正宗」とか、雲右衛門系統の演題を専ら得意とした。

雲節を極めて平易なく節調に引下げ、老幼婦女子にも歌へるやうに敵化せしめ

た。例へば繪圖を假名を振つたるごとくに、と云ひ度い。

なづけて、此を、雲月節。

果せる哉、それは俗耳に入り易く、そこかしこにて迎へられた。

いかに平易であつたかは、以後の女流浪曲家の殆んど大半が今日に至るまでみなこの雲月節であることでも分る、初代雲月は正に判然と男だつたのに。

加ふるに、一段の浪花節のあと、餘興と唱へて彼は、浪曲入りの博多節、米山甚句、都々逸を熱唱した。

熱唱と云ふ言葉が當てはまるほど、本格の浪花節を語るときもさうであつたが、身體を見苦しく振り、首を左右へ、夢中で歌ふ。此は、至つて、大家らしからぬ安手な感じを、與へられたが、大衆には却つて歡ばれた。

しかも、この俗曲を歌ふことも斯界はじめての試みであつたから、いよ／＼人氣は昂まる許りで、これ又、左近、式部、米若、うの子、天晴と男女浪曲家の模倣者、續出するに至つた。